

国立
国会
図書館

月報

NATIONAL
DIET
LIBRARY
MONTHLY
BULLETIN
2026.3



海外の日本研究資料
家紋研究資料をめぐるエピソード
小山 騰

世界図書館紀行
フランス国立図書館

国立
国会
図書館
月報

NO. 779
MARCH 2026

CONTENTS

1 外国人の眼で能をみる

— T. Nogami, *Japanese Noh Plays: How to See Them* —
今月の一冊 国立国会図書館の蔵書から

30 館内スコープ

国会サービスで世界とつながる

31 本屋にない本

『こくぶんけん(推し)』の一冊
創立50周年記念展示

32 NDL Topics

5 海外の日本研究資料

家紋研究資料をめぐるエピソード

小山騰

20 世界図書館紀行

フランス国立図書館



表紙：杉浦非水『非水創作図案集』より
文雅堂 1926 図版 51 枚 36cm
<https://dl.ndl.go.jp/pid/967445/1/46> (モノクロ)

外国人の眼で能をみる

— T. Nogami, *Japanese Noh Plays: How to See Them* —

藤戸敬貴



口絵及び標題紙。

能『草紙洗』の題名は、英語では“Sōshi-arai (Komachi Washing the Poem Book)”と表現されています。英訳の苦心が垣間見えます。

Japanese Noh Plays: How to See Them

T. Nogami, Tokyo: Board of Tourist Industry, Japanese Government Railways, 1934, 64p ; 20cm
<https://dl.ndl.go.jp/pid/1680958>

本書は、1934（昭和9）年に鉄道省国際観光局が創刊した英語版叢書「ツーリス
トライブラリー」^[1]の第2巻です。第1巻 *Tea
Cult of Japan*（茶の湯）及び第3巻 *Sakura*（桜）
とともに、創刊ラインナップの1冊として刊
行されました。

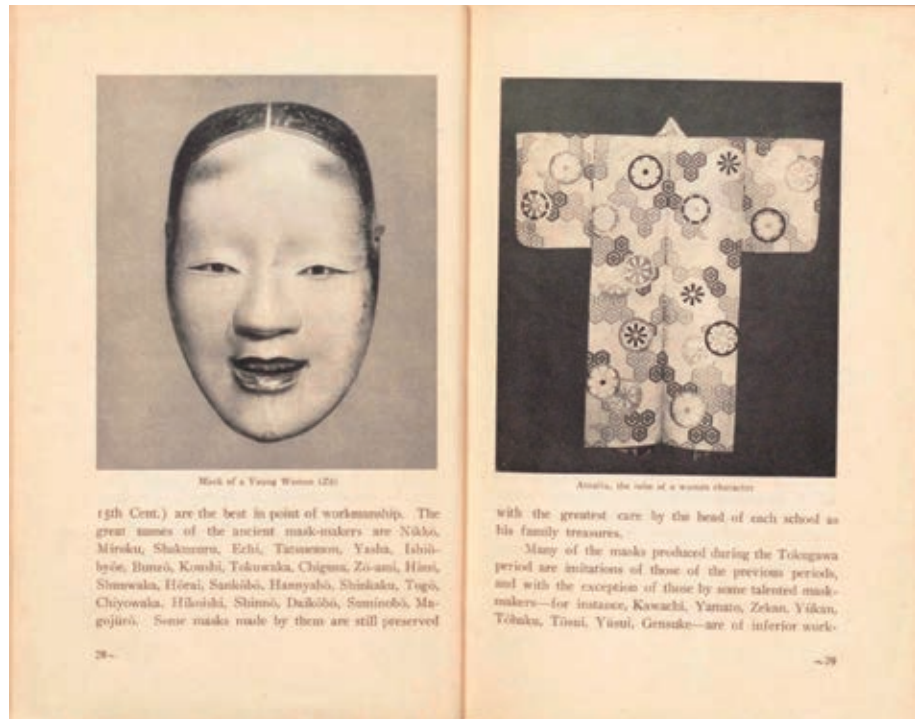
著者の野上豊一郎（1883～1950）
は夏目漱石（1867～1916）門下の英
文学研究者ですが、高浜虚子（1874～
1959）の誘いで鑑賞した能『葵上』^{あおいのうえ}に感
銘を受けて能楽研究にも取り組むようにな
り、西洋演劇と比較しつつ能の演劇的特質を
剔抉する^{てっけつ}など、能楽研究界に新風を吹き込み
ました。英文学研究者と能楽研究者という
2つのベルソナをもつ野上は、バーナード・
ショー（George Bernard Shaw, 1856
～1950）やポール・クロアデル（Paul
Claudel, 1868～1955）といった海外
の文学者が来日した際、能楽鑑賞の案内をし
ています。外国人に英語で日本文化を紹介す
るという叢書「ツーリストライブラリー」の
目的に照らせば、野上はうってつけの人物
だったといえるでしょう。

本書は70頁に満たない小冊子ですが、能舞
台（第1章）、演出（第2章）、能面及び装束
（第3章）、能の分類（第4章）、番組構成（第
5章）などの能のエッセンスが凝縮されてい



Mr. Bernard Shaw wearing the Mask of Okina

能面を掲げるバーナード・ショー。
翁（おきな）の面の表情も相俟って、非常に
ユーモラスな写真となっています。
p.11 <https://dl.ndl.go.jp/pid/1680958/1/9>



図版も豊富です。
pp.28-29 <https://dl.ndl.go.jp/pid/1680958/1/19>

ます。能をギリシヤ悲劇や歌舞伎と比較しつ
つ論ずる箇所もあり、外国人読者の関心を大
いに惹いたことでしょう。また、『羽衣』な
どの具体的な曲目の内容は外国人読者にとつ
て——もしかすると日本人読者にとつても？
——馴染みがないと思われるところ、詳しくめ
に粗筋を紹介するなどの配慮が行き届いてい
ます。「能の鑑賞方法」と題する第6章では、
能には視覚的要素と聴覚的要素とがあつて曲
目により力点が異なるとか、ドラマチックな
能を期待するのであれば一場物（いちばぶつ）をみよ、など
の意外に（？）実践的なアドバイスもありま
す。最終章（第7章）は主要曲目の一覧であ
り、こんにちの日本人読者にとつても有用な
能楽案内となり得るでしょう。

を創造することにあり、観客にとつて必要な
のは、役者の所作や伴奏の律動に内在する美
を鑑賞することなのです。膝元の謡本（うたいほん）
を鑑賞することなどは、一部の日本人観客（昔
はそんな観客は滅多にいなかった、と野上は
嘆きます）とは違って、謡本を読むことがで
きない外国人観客は舞台上の出来事に意識を
集中するほかないのですが、だからこそ能固
有の美を感得する可能性が拓かれるというわ
けです。

もちろんここには外国人読者へのリップ
サービスが多分に含まれていると思われませ
が、それを差し引いてもなお真理を突いてい
るといえるのではないのでしょうか。外国人と
して・外国人であるかのように能を鑑賞する
こと。これが、現代生活の日本人が何処かに
置き忘れてきた日本の美を思い出すための鍵
となるかもしれません。

昭和9年の野上豊一郎

本書の序文の末尾に付された署名の日付は、「March, 1934」となっています。実はこのとき、野上は「法政騒動」の渦中にありました。野上は法政大学の理事・学監・予科長として同大学の発展に尽力していましたが、財政問題や人事問題（野上や内田百閒（1889～1971）などの漱石門下をはじめとする帝国大学出身者が法政大学の教師陣の多くを占める中、法政大学生え抜きの教師を増やすべきだという意見があったようです）、さらには同じ漱石門下の森田草平（1881～1949）との対立も絡み、野上派と反野上派との間で学内抗争が巻き起こりました。「March, 1934」すなわち1934（昭和9）年3月は、野上がこの騒動の煽りを受けて休職に追い込まれていた時期だったのです。

その後も学内の混乱は続き、野上は法政大学を去らざるを得なくなりますが、他方で学務から解放され、能楽研究や英文学研究にさらに打ち込むことにもなります。

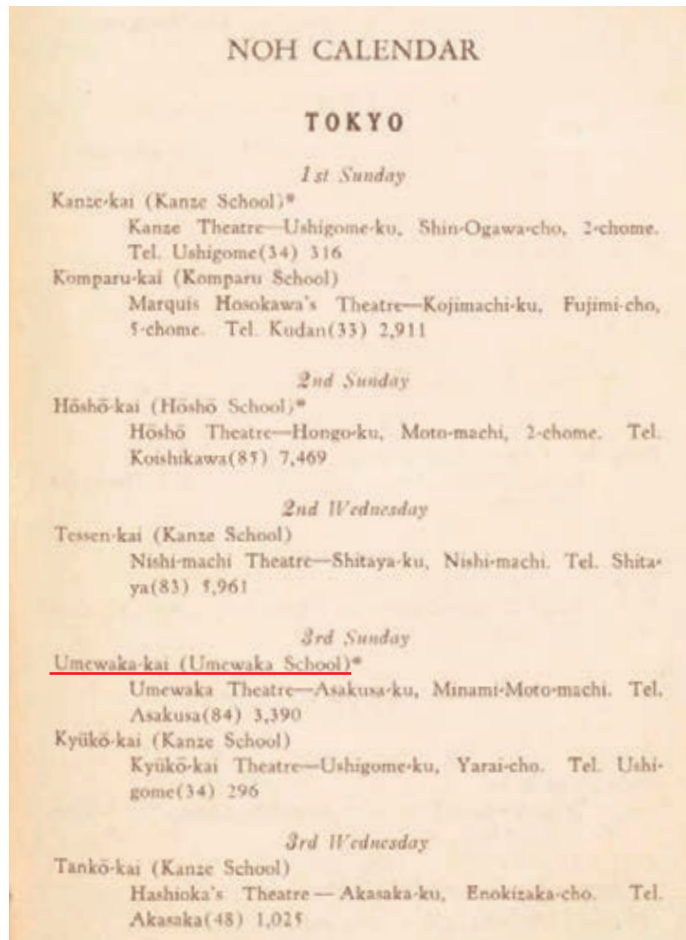
ちなみに、野上は1941（昭和16）年に法政大学に復帰し、戦後は学長（後に総長）を務めます（1946～1950）。野上没後の1952（昭和27）年に発足した野上記念法政大学能楽研究所は、現在に至るまで我が国における能楽研究の重要拠点であり続けています。



法政大学の混乱を伝える1934（昭和9）年1月7日『東京朝日新聞』の紙面。三人の顔写真のうち上から一人目が野上、二人目が森田草平です。「予科四十七教授 結束・辞表を提出 学内の騒ぎ急転」『東京朝日新聞』1934.1.7

昭和9年の能楽界

本書末尾に付されているNoh Calendar (<https://dl.ndl.go.jp/pid/1680958/1/38>)をよく御覧ください。Kanze School (観世流)、Komparu School (金春流)、Hōshō School (宝生流)、Kongō School (金剛流)、Kita School (喜多流) という現存するシテ方五流派とともに、「Umewaka School」という文字列も見えます。梅若流は大正時代に観世流から独立して生まれた流派です。（観梅問題）。観梅問題は最終的に1954（昭和29）年に決着し、梅若流は観世流に合流しましたが、昭和9年の時空には梅若流という流派が確かに存在していたということが本書を通じて実感できます。



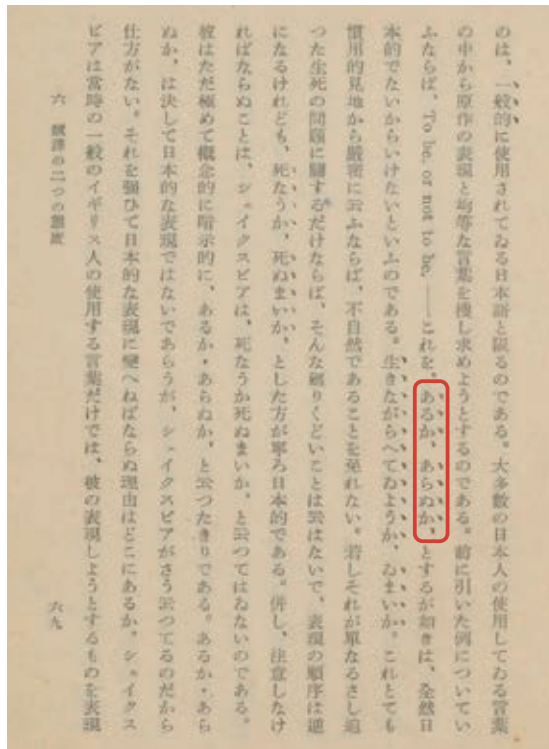
Noh Calendar
p.65 <https://dl.ndl.go.jp/pid/1680958/1/38>

野上豊一郎の翻訳理論

英文学研究者としての顔もある（むしろそちらが本職です）野上は海外文学の日本語訳を数多く手掛けましたが、翻訳理論にも強い関心があり、1938（昭和13）年に『翻譯論 翻譯の理論と實際』岩波書店（<https://dl.ndl.go.jp/pid/1222979>）を刊行しています。西洋のものは西洋のものらしく表現すべきであり、例えばシェイクスピアの“To be, or not to be”は「あるか、あらぬか」と訳すべきだとする野上の翻訳理論は、文学界の一部に論争を呼び起こしました。

ちなみに、野上には「能はいかに見るべきか 能に馴れない人のために」文芸春秋社編『新文芸思想講座』第二巻、文芸春秋社、1933（<https://dl.ndl.go.jp/pid/1875636/1/186>）という論文があり（もちろん日本語）、当然ながら本書と内容的に大きく重なります。この論文と照らし合わせることで、本書を野上の翻訳理論のいわば逆側からの実践篇——能楽用語という日本のものを英語という西洋の言語へとどのように訳すか——として読み直すことも可能ではないでしょうか。

※ ただし、本書の謝辞に“Mr. T. Inoue and Mr. A. F. Thomas who helped me to finish this work”とあることから、本書の英語表現の全てが野上の手によるものであるかどうかについては慎重な留保が必要かもしれません。



野上豊一郎『翻譯論 翻譯の理論と實際』岩波書店,1938
<https://dl.ndl.go.jp/pid/1222979>
 (右) “To be, or not to be” の翻訳を論じたページ (p.69)
<https://dl.ndl.go.jp/pid/1222979/1/42>
 (左) 標題紙
<https://dl.ndl.go.jp/pid/1222979/1/3>

- 1 ツーリストライブラリーについては、光島有里「Japanese folk-toys(Tourist library; 26)—世界に発信した郷土玩具—」本誌 754 号（2024年2月）も御参照ください。
https://dl.ndl.go.jp/view/download/digidepo_13255460_po_geppo2402.pdf?contentNo=1#page=3
- 2 前場・後場の区切りがない能のこと。単式能ともいいます。これに対して、前場・後場の二場面がある能は二場物又は複式能といいます。

○参考文献

西野春雄「講演記録 能楽研究の開拓者 野上豊一郎」伊海孝充編『野上豊一郎の能楽研究』（能楽研究叢書；4），共同利用・共同研究拠点「能楽の国際・学際的研究拠点」野上記念法政大学能楽研究所，2015，p.1 <KD451-L27>
 『法政大学百年史』法政大学，1980 <https://dl.ndl.go.jp/pid/12114411>
 宮永孝「昭和八、九年の「法政騒動」」『社会志林』59(4)，2013.3，p.200 <Z6-294>
 山本史郎『翻訳の授業 東京大学最終講義』（朝日新書；768），朝日新聞出版，2020 <KE26-M10>

※<>内は当館請求記号



野上豊一郎と妻・弥生子
 (出典)「学者も戦線へ 野上夫妻のお土産話」『東京朝日新聞』1939.11.19
 野上弥生子（1885-1985）は小説家として高名で、代表作として『迷路』『秀吉と利休』などがあります。

海外の日本研究資料

家紋研究資料を めぐるエピソード

海外にも日本に関係する多彩な資料があり、日本研究の歩みがあります。ケンブリッジ大学図書館に長く勤務され、ユニークな視点で日英関係を研究してこられた小山騰氏に、日本の家紋をめぐる研究について、4つのエピソードを紹介していただきました。

わが国の家紋への関心は、海を隔てて、思いがけない形で互いに影響を及ぼし合っていたのです。



小山 騰 (元ケンブリッジ大学図書館日本部長)
KOYAMA Noboru

1948年生まれ。1985年から2015年までケンブリッジ大学図書館日本部長。

主な編著書に、『国際結婚第一号—明治人たちの雑婚事始』（講談社、1995年）、『破天荒明治留学生列伝—大英帝国に学んだ人々』（講談社、1999年）、『ケンブリッジ大学秘蔵明治古写真—マーケザ号の日本旅行』（平凡社、2005年）、『日本の刺青と英国王室—明治期から第一次世界大戦まで』（藤原書店、2010年）、『ケンブリッジ大学図書館所蔵アーネスト・サトウ関連蔵書目録』（ゆまに書房、2016年）、『ケンブリッジ大学図書館と近代日本研究の歩み』（勉誠出版、2017年）、『アーネスト・サトウと蔵書の行方—『増補浮世絵類考』の来歴をめぐって』（勉誠出版、2020年）などがある。

Episode 1

太刀献上記



写真1 沼田頼輔『日本紋章学』
明治書院,1926.
<https://dl.ndl.go.jp/pid/1879378>



写真2 杉村楚人冠 (広太郎)
ジャーナリスト・随筆家
(杉村広太郎『楚人冠全集』
第11巻,日本評論社,1938.)
<https://dl.ndl.go.jp/pid/1239825/1/4>

日本の家紋・紋章に関する最初の本格的な研究書は、一九二六年に刊行された沼田頼輔著『日本紋章学』であり、同書は現在でも重要な参考文献である(写真1)。沼田は紋章研究に十四、五年を費やし、同書の刊行により帝国学士院賞を受賞した。

沼田によると、彼の紋章研究は三つ柏の家紋とする旧土佐藩主の山内家の当主山内豊景から質問を受けたことを契機として開始し、途中研究は停滞したが、朝日新聞の記事により奮起を促され、また友人であり、弁護士・バビロン学会の創設者の原田敬吾の支援を得て研究を完遂することができたという。以上の三点が沼田の大著が成就する大きな要因であった。

では沼田の家紋研究を促進させた朝日新聞の記事はどのようなものであったのだろうか。それは杉村楚人冠(広太郎)(写真2)の「太刀献上記」の中の一部であった。第一次世界大戦開始後(一九一四年)に、朝日新聞社の社長村山龍平が所蔵する日本刀をベルギー国王アルベール一世に献上する話が持ち上がった。当時、杉村楚人

冠は朝日新聞の特派員としてヨーロッパに派遣され、ロンドンに滞在中であり、その日本刀(衛府の太刀)をアルベール一世に献納する大役を仰せつかった。楚人冠がその経緯を書いた新聞記事が「太刀献上記」である。「太刀献上記」は最初朝日新聞に掲載され、後には杉村の著作『戦に使して』に収録された。

楚人冠はベルギー国王に日本刀を献上する際、国王から下問される場合に備えて、前もって贈呈する太刀について詳しく知る必要があると考えていた。しかし、日本から詳細な情報がロンドンに滞在している楚人冠に送られて来なかった。そこで、楚人冠はしかたなくロンドンで日本刀に精通した人物を探すことになり、東洋美術商の山中商会に相談し、アンリ・ジョリー(Henri Joly)という人物から献上する太刀について教示を受けることになった。楚人冠はジョリーを以下のように紹介している。

ジョリーさんといふは日本の刀剣に大の趣味を持つて永年之が研究に身を委ねてゐる人で、鏝なども大分蒐集してゐる。日本に行つたことはないが、日本の書物も平気に読むし、日本語も一寸話す。日本の刀剣に関する翻訳もしてゐれば著書も随分ある。山中商会でも少し面倒なことは先生に聞きに行く

のだといふ話であつた。

実際に楚人冠がジョリーから教えを受けたのは、一九一五年一月下旬頃のこと、その時の様子を次のように描写している。

エイチ、エル、ジョリー先生を迎へて其教へを乞ふこととした。丁度其日は白耳義公使ライン伯爵も僕のホテルへ太刀を見に来られたのでジョリー君は衛府の太刀の性質から備前長船の事作者七郎左衛門行包の事に及び、太刀を捧ぐる時は刃の方を手前にするとか、貴人の前で刀を抜くには先づ四分位に止めて、決して抜放つべきものでないとか、事も細やかに教へて呉れた末、型の通り伯爵と僕との許を求めた上、彼はすうりと刀を抜き放つた。伯爵は抜き放つた刀を手にとつて二三度打ふりながら成程日本の刀は重量の調和が非常に能くとれてさし

もに重いのを振りしても手が疲れぬと、ヨーロッパ人だけに妙な所に感心してゐる。夫から刀の造りを兎見角見類に感心してゐたが鞘の上にある鶴の丸の紋に目をと

めて、皇帝「ベルギー国王アルベール一世」は屹度之を尋ねになるから前以て調べておいた方がよいとのことであつた。之をジョリー先生に質せば凡そ鶴の丸には丸の少し開いたのと全くひつ包んだのとあつて其「開いた」のは赤穂の毛利家だけで用ひた紋だが「ひつ包んだ」になると椎野家を始め公卿では日野、日野西、万里小路、鳥丸、北小路、水本の諸家、大名では毛利、諏訪、鳥居、戸沢、浦松、柳原など色々あると、夫はく説明が微に入り細に入る。

ベルギー国王に太刀を献上する話は英国の新聞『タイムズ』などでも報道された。同紙に掲載された太刀の写真をみると、たしかに太刀の鞘にいくつかの鶴の丸の家紋が裝飾されていたことがわかる(写真3)。沼田頼輔は楚人冠の新聞記事を読み、本邦の学者が自国の家紋の研究をなおざりにしてきた点について、次のような感慨を抱いたという。ちょうどそれは沼田の家紋研究が行き詰まっていた時期にあつたが、その新聞記事に刺激を受け、それ以降より

一層紋章研究に励むことになつたという。

用意周到なる杉村君はこの太刀に鶴丸紋を居ゑたるを見て、必ず国王よりその下間に接せんことを慮り、これが説明の準備を為さんと欲せしも、當時在留邦人にして、これを知るものなかりしかば、已むを得ず英国紋章学者ジョリー氏に質して、始めてその要領を知ることを得て、以て奉献の事を果たしたりきといふ。当時、余はこの事実の同新聞に伝へられしを見て、深く英国人の斯学しがくに忠実なることを感ぜしと同時に、本邦人のこれを忽諸こつしよに付せし事を遺憾ごんとしたりき。

以上のように、沼田は楚人冠が英国紋章学者ジョリー氏に日本の家紋について教示を受けた点に発奮し、決意を固くして自身の研究に全力で取り組むことにしたという。では、実際の状況はどうであつたのであろうか。まず、楚人冠の著述を詳細に検討してみたい。原則として、楚人冠の「太



写真3 The Times
1915年1月30日付 p.5.
<国立国会図書館請求記号 YB-F3 >



写真4 『日本紋帳』p.47
Hugo Gerard Ströhl, *Japanisches Wappenbuch, Nihon moncho: ein Handbuch für Kunstgewerbetreibende und Sammler*, Wien: Anton Schroll, 1906.
<国立国会図書館請求記号 Ba-144>

すなわち、ジョリーはその日に家に戻り、自分の蔵書である独文のフーゴ・スト

之をジョリー先生に質せば、ジョリー君いづれ能く調べた上でといつて、其の日は帰つたが、翌日寄越した手紙によると、凡鶴の丸には(後略)

刀献上記」は朝日新聞に掲載された記事と、『戦に使用して』に収録された記事はほとんど同じであるが、ごくわずかに異なる場合がある。新聞記事では、ジョリーは楚人冠の質問を受け、鶴の丸の紋について同日に解説していたように読み取ることができ、実は次の『戦に使用して』の引用からわかるように、ジョリーは楚人冠の質問に対して翌日に手紙で回答していたのである。下線のところが『戦に使用して』の中であらたに付け加えられた部分である。

レル (Hugo G. Ströhl) 著『日本紋帳』(Japanisches Wappenbuch) を使って調査した後、翌日に楚人冠に英文の手紙を送り、新聞記事に掲載された「鶴の丸云々」の説明を報告していたのである。手紙が英文で書かれていたことは、二つの鶴の丸の形容部分に「オープン (open)」と「クローズト (close)」というフリガナが付されていたことから判明する。

実は、アンリ・ジョリーは日本関係の和古書や洋書などの蔵書家で、家紋にも興味を持ち、フーゴ・ストレールの著書を所蔵していた。彼が同書を所蔵していたことは、死後に彼の蔵書が売りに出された際の古書店の目録から判明する。ストレールの著書の四七〜四八ページには、二つの鶴の丸の紋「開いた」ものと「ひつ包んだ」もの

および同紋を使用した公家や大名などの名前が列挙されていた(写真4)。すなわち、朝日新聞の記事に掲載された情報が含まれていた。

ただ、ジョリーの英文の手紙を受け取った楚人冠はいくつかの誤読をしていた。楚人冠の記事を子細に検討すると、以下のことが判明する。まず赤穂の毛利家というのは赤穂の森家のことである。また、万里小路は勘解由小路、水本は三室戸、浦松は裏松のことである。さらに、浦松については『戦に使用して』では順序を逆にして松浦に

変更されていた。すなわち、楚人冠はジョリーの手紙に記載されたローマ字名を正しく漢字名に直していなかったのである。

いずれにしても、楚人冠の朝日新聞の記事を読んだ沼田頼輔は、日本の家紋が海外で英国紋章学者ジョリーなどによって盛んに研究されていると、いい意味で過大に評価し、そのことを日本人として恥辱に感じ、それを跳ね返すために日本人の威信を背負い、紋章研究に一層専心することにしたのである。ただ、沼田はアンリ・ジョリーのことを英国の紋章学者としているが、それは誤解で、彼はロンドン在住のフランス人で、本職は電気自動車の電池の技術者であった。もちろん、彼は日本美術に通曉しており、特に鐔などの刀装具の専門家であった。

- 1) 沼田頼輔『日本紋章学』明治書院, 1926. 自序 pp.1-5.
- 2) 『朝日新聞』1915年4月27日付 p.6.
- 3) アンリ・ジョリーは本阿弥光遜著『日本刀』(日本刀研究会, 1914) を旧蔵しており、同書の「刀剣取扱の作法」の部分に参照したようである。彼の死後、同書は国立美術図書館に収蔵された。
- 4) 『朝日新聞』1915年4月27日付 p.6.
- 5) 沼田頼輔『日本紋章学』明治書院, 1926. 自序 pp.2-3.
- 6) 杉村広太郎『戦に使用して』至誠堂書店, 1915. p.440.
- 7) Hugo Gerard Ströhl, *Japanisches Wappenbuch, Nihon moncho: ein Handbuch für Kunstgewerbetreibende und Sammler*, Wien: Anton Schroll, 1906.
- 8) Bernard Quaritch (Firm), *Catalogue*, No.362 (February 1921). p.102.

第一次世界大戦以前における 外国人による日本の家紋研究略史



写真5 ギメ美術館が所蔵している、徳川家慶旧蔵の長櫃。家紋が裝飾されている。
国際日本文化研究センター日文研データベース「外像」
<https://sekiei.nichibun.ac.jp/GAI/ja/detail/?gid=GO024002&hid=112>

日本に在住した英国の公使館員トーマス・マクラッチー (Thomas R. H. McClarchie) は、一八七六年に日本アジア協会 (Asiatic Society of Japan) の会合で「日本の紋章」 (Japanese Heraldry) という論文を発表した。同論文は翌年に刊行された同協会の紀要に掲載された⁽⁹⁾。マクラッチーは西洋の紋章との比較で、家紋などとして使用された日本の紋章を主に武家の歴史に沿って詳細に紹介した。

マクラッチーの論文に続いて、二点のフランス語の文献、ジュールジュ・アペール (Georges V. Appert)⁽¹⁰⁾、木下広次共著『古代の日本』 (Ancien Japon) および L・ド・ミルエ (Léon de Milloué)、カワムラ・セイイチ (Skawanoura) 共著『将軍家慶 (1838-1853) の宝箱 紋章学と歴史研究』が刊行された。一八八八年に出版された前者では、武鑑などから引用された家紋の図版や表が九十ページ以上にわたり掲載されている。一八九六年に出版された後者は、ギメ美術館が所蔵している第十二代将軍徳川家慶旧蔵の長櫃 (「宝箱」) (写真5) に飾られた家紋およびその家紋を使用した大名家などを列挙した文献である (次頁写真6)。長櫃には二百七十一個の家紋が掲載されていた。

一方、ドイツ語圏では二十世紀に入ってから、二点の重要な文献が出版された。一つは一九〇三年にベルリンで刊行されたルドルフ・ランゲ (Rudolf von Lange) 著「日本

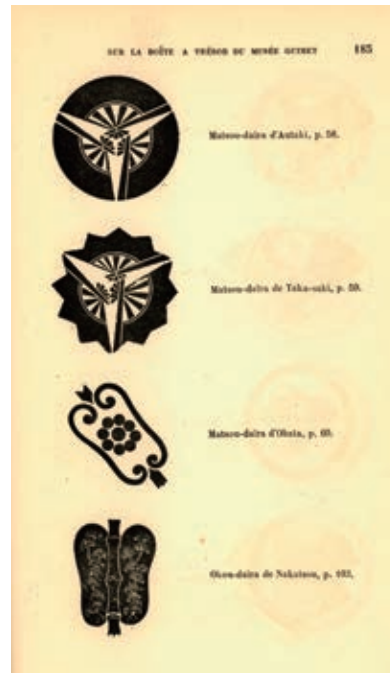


写真6 『将軍家慶（1838-1853）の宝箱 紋章学と歴史研究』において、互いに似たモチーフの家紋を集めて掲載している箇所。
L. de Millioué & S.Kawamura, *Coffre à trésor attribué au shôgoun Iyê-yoshi (1838-1853) Étude héraldique et historique*, Paris: E. Leroux, 1896, pp.184-185 <国立国会図書館請求記号 F-9>

の紋章」(Japanische Wappen)である。その長文の論文は『ベルリン大学東洋語学校論文集』(Mittellungen des Seminars für Orientalische Sprachen an der Königlichen Friedrich Wilhelms-Universität zu Berlin) 第一部門東アジア編の第六年度報(一九〇三年⁽¹⁾)に収録されていた。
ルドルフ・ランゲはベルリン大学東洋語学校の日本学の教授で、お雇い外国人として日本に滞在した経験があった。ランゲの「日本の紋章」は和古書などの日本語文献を多用した学術論文で、家紋の図版も千三百三十点ほど掲載されていた。注目すべき点は、家紋に関する最初の重要な文献である『見聞諸家紋』(『群書類従』第四百二十四所収)に言及していたことである。なお、東洋語学校の日本学の講師辻高⁽²⁾衡がランゲの研究を支援した。
もう一つのドイツ語文献は、ウィーンで刊行されたフーゴ・ストレーレル(Hugo G. Ströhl)著『日本紋帳』(Japanisches Wappenbuch)である(写真7)。アンリ・ジョリーが利用した書籍である。同書は参考文献として『文政武鑑』、『嘉永武鑑』、『早引定紋鑑』、『いろは引紋帳』、『新調更正華族名鑑大全』、『日本諸侯之旗印』などを利用し、家紋の数も類似のものを含めれば六百点以上、掲載された家紋に添付された番号で数えれば五百四十三点が掲載されて

いた。また、ストレーレルの研究を援助した人物の中には、ハインリッヒ・シーボルト(Heinrich von Siebold)大シーボルトの次男)、広島高等師範学校の教員としてウィーン大学に留学していた中目覚⁽³⁾、それに前述の「日本の紋章」の著者ルドルフ・ランゲなどが含まれていた。



写真7 『日本紋帳』表紙
Hugo Gerad Ströhl, *Japanisches Wappenbuch, Nihon moncho: ein Handbuch für Kunstgewerbetreibende und Sammler*, Wien: Anton Schroll, 1906.
<国立国会図書館請求記号 Ba-144>

続いて、家紋研究の舞台はロンドンに移動する。ロンドン日本協会は一八九一年に設立され、『倫敦日本協会雑誌』(Transactions and Proceedings of the Japan Society, London) が翌年から刊行され始めた。一九〇九年のロンドン日本協会の例会で、G・アンブローズ・リー (Gordon Ambrose Lee) が「日本の紋章についての雑誌」という論文(ペーパー)を読み、同論文が同年に刊行された『倫敦日本協会雑誌』第八巻第一部に掲載された。アンブローズ・リーは英国の紋章学院 (College of Arms) の紋章官 (Herald) で、まさに沼田が言及した英国の紋章学者に相当する。しかも、彼は一九〇六年には山中商会ロンドン支店の支配人富田熊作との共著で『日本の貴重な話』(Japanese Treasure Tales) という小著を出版していた。アンブローズ・リーは紋章の専門家の立場から、日本の紋章、特に家紋についてヨーロッパや古代エジプト・メソポタミアの紋章との比較などを通して適切に紹介した。

さらに一九一一年には、アルバート・コープ (Albert J. Koop) はロンドン日本協会の例会で「紋の構成ときらびやかな装飾」という論文(ペーパー)を読み、同論文は翌年に刊行された『倫敦日本協会雑誌』に掲載された⁽¹⁵⁾。アルバート・コープはヴィクトリア・アルバート博物館が大学の卒業者を職員に採用

し始めた最初の世代に属し(コープはケンブリッジ大学を卒業し、二、三年私立学校の教員をした後、ヴィクトリア・アルバート博物館に入館した)、日本語を学び、一九二三年には日本の美術商稲田賀太郎との共著で『銘字便覧』(Japanese Names and How to Read Them) を出版した⁽¹⁶⁾。同書は日本美術研究および日本研究のための参考文献である。彼は漢字を修得したので、中国語文献も利用することができた。コープは後年、ヴィクトリア・アルバート博物館の金属細工部の部長に就任した。

コープの論文は『明治新選』以呂波早引紋帳大全』、『いろは引紋帳』、『無双広益紋帳』などに言及したことからもわかるように、家紋の用語の分析などで本領が発揮されていた。彼の日本語能力を駆使した論文であった。以上の三点の紋帳は、ヴィクトリア・アルバート博物館の図書館である英国の国立美術館図書館 (National Art Library) が所蔵していた。

- 9) Thomas R. H. McClatchie, 'Japanese Heraldry', *Transactions of the Asiatic Society of Japan*, Vol. 5, Part 1(1877).
- 10) Georges Appert & Hiroji Kinoshita, *Ancien Japon*, [Tokyo: Kokubunsha], 1888.
- 11) L. de Millioué & Seiichi Kawamura, *Coffre à trésor attribué au shōgoun Iyē-yoshi (1838-1853) Étude héraldique et historique*, Paris: E. Leroux, 1896.
- 12) Rudolf von Lange, 'Japanische Wappen', *Mitteilungen des Seminars für Orientalische Sprachen an der Königlichen Friedrich Wilhelms-Universität zu Berlin*. Abt. 1, Ostasiatische Studien, Jahrgang VI (1903). pp.63-281.
- 13) Gordon Ambrose Lee, 'Some Notes on Japanese Heraldry', *Transactions and Proceedings of the Japan Society, London*, Vol. 8, Part 2 (1909). pp.270-292.
- 14) Kumasaku Tomita & G. Ambrose Lee, *Japanese Treasure Tales*, [London:] Yamanaka & Co., 1906.
- 15) Albert J. Koop, 'The Construction and Blazonry of Mon', *Transactions and Proceedings of the Japan Society, London*, Vol. 9 (1912). pp.280-312.
- 16) Albert J. Koop & Hogitaro Inada, 銘字便覧 / Japanese Names and How to Read Them, [London:] Eastern Press, 1923.

国立美術図書館の日本美術専門家たち ～エドワード F. ストレンジと日本コレクション目録編纂～

ヴィクトリア・アルバート博物館はデザインや装飾美術などを専門とする博物館である。同博物館は一八五二年に開館した。当初はサウス・ケンジントン博物館と称したが、十九世紀の終わりに現在の名称に変更した。国立デザイン学校の図書館も同博物館の中に移動し、一八六五年に国立美術図書館に改称した。国立美術図書館はヴィクトリア・アルバート博物館の中に設置されているので、通常はヴィクトリア・アルバート博物館の図書館と見なされている。ただし、現在博物館の方は毎日開館しているのに対し、図書館は週三日間開いているだけである。

ヴィクトリア・アルバート博物館は早い時期から日本の美術品を集め始めた。国立美術図書館も日本美術の資料を収集し、一八九〇年代に日本美術に関する目録を二冊出版した。最初の目録は和古書、絵本、画帳、版画などの日本語または日本の資料（日本コレクション）を収録し、一八九三年に出版された。二冊目は日本美術関係の洋書の目録で、一八九八年に刊行された。

日本コレクションの目録はエドワード・F・ストレンジ (Edward Fairbrother Strange) によって編纂された。小脇源治郎が日本語の翻訳作業を援助した。小脇は英国に留学中翻訳などの仕事で学資を稼いでいたという。小脇は帰国後三井物産に入社し、同社では重役などとして活躍した。ストレレンジも「小脇は

国立美術図書館のために翻訳の仕事に従事したが、我々は目録を準備する際にその小脇の翻訳を利用した」と述べている。目録が出版された当時、国立美術図書館は八百点の日本語書籍、一万二千点の浮世絵版画（単品だけではなく、画帳などに入っているものを含む）、四百点の線描画を所蔵していたという。

二十世紀の最初の四半世紀（一九〇一年―一九二五年）頃、ヴィクトリア・アルバート博物館には二人の日本美術の専門家がいた。一人は前のエピソードで紹介したアルバート・コープである。もう一人はエドワード・F・ストレンジ（写真8）である。年齢、地位、業績などを考慮すると、ストレレンジが先輩、コープが後輩に相当する。ストレレンジは一八六二年に英国のウースターで生まれた。ウースター大聖堂学校やキッターミンスターのグラマースクールで教育を受け、一八歳頃に公務員になった。一八八八年（二五歳の時）には、英国人事委員会による博物館のアシスタント (Assistant) の予備試験に合格した。博物館のアシスタントはキュレーター (curator) 関係の最初のポストであろう。

ストレレンジは一八八九年にヴィクトリア・アルバート博物館に入館し、一八九一年から国立美術図書館に勤務した。二年後に前述の日本コレクションの目録を刊行した。目録刊行時の地位がアシスタントであったので、お



写真8 エドワード F. ストレンジ (Edward Fairbrother Strange)
 ヴィクトリア・アルバート博物館ウェブサイト
<https://collections.vam.ac.uk/item/O752976/lieutenant-colonel-edward-fairbrother-strange-drawing-dodd-francis/>

そらく彼はヴィクトリア・アルバート博物館にはアシスタントとして入館したのであるう。

ストレンジはもともグラフィック関係に興味を持っており、国立美術図書館では版画や線描画などの目録や索引を作成する仕事に従事し、また資料の収集に関しては、当時の図書館のトップ (Keeper) であるウィリアム・H・ウィール (William H. Weale、美術史家) の下で、書籍だけではなく、版画、線描画、写真などを収集したという⁽²⁰⁾。要するに、グラフィックに関連した図書館資料を充実させたのであろう。そこで、彼は浮世絵版画などの日本美術資料に興味を持ち、前記した国立美

術図書館所蔵の日本コレクションの目録を刊行することになったのであろう。

ストレンジは浮世絵関係を含めて多数の著作物を刊行した著述家であり、百科事典『ブリタニカ』の寄稿者でもあった。日本美術の分野では、日本コレクションの目録に続いて、一八九七年に『日本のイラストレーション』(Japanese Illustration) という書籍を出版した⁽²¹⁾。同年には、アシスタントから副部長 (Assistant Keeper) に昇進した⁽²²⁾。

ヴィクトリア・アルバート博物館は一九〇九年に新しい建物が完成することを契機にして、内部組織の編成を変えた。その結果、新たに彫刻・イラストレーション・デザイン (Engraving, Illustration and Design, EID) という部が創設された。国立美術図書館のグラフィック関係の資料、たとえば浮世絵版画などは、EIDに移された。EIDの創設の動きを推進したのは(または扇動したのは?) ストレンジであるといわれ、当然彼も同部に移動し、部長 (Keeper) に就任した。

ヴィクトリア・アルバート博物館にとって、ライバル(または目標とする対象?) にあたるのは大英博物館である。大英博物館では、同館の図書館(大英博物館図書館、現在の英国図書館)とは別に版画・線描画部があり、後年同部から東洋版画・線描画支部が派生した。同支部ではローレンス・ビニョン(部長)

やアーサー・ウェイリー(アシスタント)が浮世絵版画などを担当していた。

ローレンス・ビニョンは著述家として日本や東洋の美術関係の著作物を刊行し、日本語や中国語を修得したウェイリーは、それらの文献の利用の面で本領を發揮した。特にウェイリーは『源氏物語』の英訳者として有名である。ヴィクトリア・アルバート博物館の場合も、多少大英博物館の状況に似ているところがある。先輩のストレンジは浮世絵関係の著作物を数点出版し、後輩のアルバート・コープはウェイリーのように日本語が直接に関係する分野で活躍した。前述したようにコープの名著は『銘字便覧』であった。

第一次世界大戦が始まると、ストレンジは軍務に就き、中佐 (Lieutenant-Colonel) の称号を与えられた。終戦時の一九一八年にはCBE(大英帝国勳章第三位)を受章している。その後、彼は食料省に入り、引き続き一九二一年頃まで同省の仕事に従事した。ストレンジが軍務などに従事していた時期、ヴィクトリア・アルバート博物館内における彼の地位については、多少不明な部分がある。いずれにしても、彼は一九一四年から一九二九年まで木工・家具部の部長 (Keeper of Woodwork and Furniture) に就任していた。ヴィクトリア・アルバート博物館内の日本関係の専門家の役職については、ストレンジが

木工部の部長であるのに対し、先述したように、アルバート・コープは後年金属細工部の部長 (Keeper of Metalwork) に就任していた。両者はそれなりの地位に就いていたといえる。

さて、再び話題を一八九三年に刊行された国立美術図書館の日本コレクションの目録に戻すことにしよう。同目録には「デザインと装飾」(デザイン・模様・家紋・各種図案資料)という部分があり、三〇点の資料が掲載されている。その中には『明治新選』以呂波早引紋帳大全⁽²⁷⁾、『いろは引紋帳』、『無双広益紋帳』⁽²⁸⁾などの紋帳が含まれている。それらの三点は、前のエピソードでアルバート・コープが言及した紋帳である。おそらくストレンジ自身がそれらを購入したのであろう。

日本コレクションの目録の編纂者であるストレンジも、紋帳を含む家紋や模様などの資料について大変感銘を受けたらしく、ロンドン日本協会の例会で「国立美術図書館(サウス・ケンジントン博物館)の日本コレクション」という論文(ペーパー)を読んだ時に次のように述べている。

わあ！ まさに日本の紋章学は、数冊の小さな本に提示されている。それらは今では一冊数ペンスで「安価に」買うことができる。さらに、それらの本により伝

統的な装飾の設計についても学ぶことができる⁽³⁰⁾。

もちろん、数冊の小さな本を代表するのは、アルバート・コープも言及した三点の紋帳であった。

- 17) *Japanese Art. I. Japanese Books and Albums of Prints in Colour in the National Art Library, South Kensington*, [London:] H.M.S.O., 1893.
- 18) *Japanese Art. II. Books relating to Japanese Art in the National Art Library, South Kensington Museum*, [London:] H.M.S.O., 1898.
- 19) 『大正人名辞典』, 東洋新報社, 1914. p.1373.
- 20) Edward F. Strange, 'Japanese Collections in the National Art Library, South Kensington Museum', *Transactions and Proceedings of the Japan Society, London*, Vol.4 (1895-1896) p.3.
- 21) Edward F. Strange, 'Japanese Collections in the National Art Library, South Kensington Museum', *Transactions and Proceedings of the Japan Society, London*, Vol.4 (1895-1896). p.2.
- 22) *The London Gazette*, September 21, 1888. p.5281.
- 23) Anthony Burton, 'Cultivating the First Generation of Scholars at the Victoria and Albert Museum', *Nineteenth-Century Art Worldwide*, 14, no. 2 (Summer 2015). p.154. <http://www.19thc-artworldwide.org/summer15/burton-on-first-generation-of-scholars-at-victoria-and-albert-museum> (accessed January 2, 2026).
- 24) Edward F. Strange, *Japanese Illustration: A History of the Arts of Wood-cutting and Colour Printing in Japan*, London: George Bell and sons, 1897.
- 25) *London Gazette*, February 19, 1897. p.992.
- 26) Anthony Burton, 'Cultivating the First Generation of Scholars at the Victoria and Albert Museum', *Nineteenth-Century Art Worldwide*, 14, no. 2 (Summer 2015). p.152. <http://www.19thc-artworldwide.org/summer15/burton-on-first-generation-of-scholars-at-victoria-and-albert-museum> (accessed January 2, 2026).
- 27) 島原五左衛門編『明治新選以呂波早引紋帳大全』, 大庭新八, 1881.
- 28) 田中菊雄編『いろは引紋帳』, 松崎半造 [求古堂], 1881.
- 29) 村上正武編『無双広益紋帳』, 前川善兵衛, 1885.
- 30) Edward F. Strange, 'Japanese Collections in the National Art Library, South Kensington Museum', *Transactions and Proceedings of the Japan Society, London*, Vol.4 (1895-1896). p.8.

1916年、ヴィクトリア・アルバート博物館に『見聞諸家紋』や紋帳などが収蔵された由来について



写真9 ウィリアム C. アレキサンダー (William C. Alexander)
Gordon Nares, 'Aubrey House, Kensington: The Home of the Misses Alexander - II', /Country Life/, May 9, 1957. p.923

ヴィクトリア・アルバート博物館（国立美術館）所蔵の家紋資料の話題に関して、次に注目したいのは同博物館が第一次世界大戦中の一九一六年に受領した寄贈である。すなわち、同博物館が寄贈の一環として受贈した日本語文献の中に『見聞諸家紋』（写本）、『早引定紋鑑』、『古代紋集』などの家紋資料が含まれていた。

これらの家紋資料中で特に興味深い文献は『見聞諸家紋』である。同書は家紋を集めた最古の写本で、二十八点が日本国内の図書館などで所蔵されている。国立国会図書館も二点所蔵している。海外の図書館に関しては、現在のところ国立美術館の写本のみが確認されている。いずれにしても、『見聞諸家紋』

を含めて、これらの家紋関係資料はどのような経緯でヴィクトリア・アルバート博物館に収蔵されたのであろうか。

銀行家で同時に卓越した美術品などの収集家であったウィリアム・C・アレキサンダー (William Cleverly Alexander) (写真9) は、一九一六年四月に急死した。その結果、彼が所蔵していた邸宅（複数）や貴重な美術品などが遺族に残された。同氏には数人以上の子供があつたが、結局三人の娘、シスリー・アレキサンダー (Cicely Alexander)、レイチェル・アレキサンダー (Rachel Alexander) としてジーン・アレキサンダー (Jean Alexander) が、美術品や邸宅の一つオーブ

レイ・ハウス (Aubrey House) (写真10) などを管理することになった。ヴィクトリア・アルバート博物館の資料では、三人の娘は「(the) Misses Alexander」と表現されている。

また、オーブレイ・ハウスは後年ロンドンで一番高価な不動産として売られた大邸宅であった。ウィリアム・アレキサンダーは大変富裕な実業家で、彼の家族がオーブレイ・ハウスに引っ越す前に住んでいた邸宅(ハリンゲイ・ハウス)では、使用人だけでも十九人雇用していたという。

ウィリアム・アレキサンダーは日本美術の魅力を認識した早期の英国人収集家の一人⁽³¹⁾で、⁽³²⁾日本美術および中国美術の収集家および鑑識眼を持った専門家として著名であった⁽³³⁾。彼自身も「大変上手にデッサンを描くことができる人物で、絵画の鑑定にも優れ、また応用美術にも造詣が深く、当初は日本美術を好んでいたが、論理的な流れで、次第に日本美術の着想の源泉である中国美術へと傾倒していった」という⁽³⁴⁾。

彼はバーリントン美術クラブ (Burlington Fine Arts Club) の会員であった。同クラブはロンドンの有名な紳士の美術クラブであり、その会員の中にはアレキサンダーのような美術品の収集家だけではなく、画家ジェームズ・マクニール・ホイッスラー (James McNeill Whistler) や画家ダント・ゲイブリエル・ロセッティ (Dante Gabriel Rossetti)

なども含まれていた。同クラブは日本の美術品や中国の陶磁器などの展覧会を開催し、アレキサンダーの収集品もそれらの展覧会で多数展示された。

また、アレキサンダーはアメリカ人の画家で主に英国で活動していたホイッスラーのパトロンであった。特にホイッスラーの若い時の支援者であった。彼のおかげで、英国はホイッスラーを評価しなかったという不名誉を受けずにすんだといわれている⁽³⁵⁾。

ホイッスラーはアレキサンダーの家族が住むオーブレイ・ハウスの三部屋を再改装し、その一つは日本美術関係の和古書や洋書を収蔵した図書室として利用されていた。また、オーブレイ・ハウスは第一次世界大戦中病院として利用された。細かい事情は省くが、アレキサンダーの死後、図書室などを病院用の部屋に改修することになった。父親が一九一六年に死亡した後、三人の娘はアレキサンダーの収集物の処分を開始することにした。最初に手を付けたのが図書室に収蔵されていた日本美術関係の和古書や洋書で、そこで三人はヴィクトリア・アルバート博物館に連絡を取った。その際に対応したのが同博物館の職員であるアルバート・コープであった。エドワード・F・ストレンジは前述したように軍務に従事していたので、同博物館にはいなかった。

ウィリアム・アレキサンダーの収集物は



写真10 オーブレイ・ハウス (Aubrey House)
Gordon Nares, 'Aubrey House, Kensington: The Home of the Misses Alexander - I', /Country Life/, May 2, 1957. p.873

変良質で、量も多かった。日本の美術品、中国の美術品、西洋の美術品、古文書、ホイッスラーの絵画や下絵などが含まれていた。アレキサンダー旧蔵のホイッスラーの作品に関しては、テート美術館 (Tate Gallery) は『灰と緑のハーモニー』シスリー・アレキサンダー嬢』や『青と銀のノクターン』チエリシ』などを所蔵している。前者はアレキサンダーの三人の娘の一人シスリーの肖像画である。アレキサンダー家の三人の娘(年長のシスリーが亡くなった後には二人)は、寄贈や売却などの手段を賢く利用し、長期間をかけて父親のコレクションを非常に上手に処分した。また、彼女らは旧宅オーブレイ・ハウスなども大変手際よく利用・管理した。

一方、日本美術関係の和古書や洋書の問題に戻ると、三人の娘は急いでオーブレイ・ハウスの部屋を病院用に改装する必要があった。同ハウスの病院への転用を考慮に入れて、三人の娘は日本の美術品と一緒に日本美術関係の和古書や洋書を、ヴィクトリア・アルバート博物館にすばやく引き取ってもらうことを要望した。

一方、ヴィクトリア・アルバート博物館は日本の美術品だけではなく、あわよくば中国の陶磁器や青銅器なども一緒に譲り受けたいと希望していた。ヴィクトリア・アルバート博物館に残された『the Misses Alexander』

の寄贈に関する資料から、そのあたりの微妙な駆け引きの様子を伺い知ることができる。^{3,5)} 同博物館側では、主にアルバート・コープが『the Misses Alexander』の寄贈を担当し、中国の陶磁器はいうに及ばず、中国の青銅器の一つですらすでに受け取った寄贈品(日本の美術品や図書)の全部よりも価値があると強調していた。

コープは収集し損ねた中国の美術品の価値を力説したが、とはいっても、もともとウィリアム・アレキサンダーの収集物の質は日本のものを含めて非常に高く、ヴィクトリア・アルバート博物館はアレキサンダーの三人の娘の寄贈により、最良の日本の美術品(漆器、印籠、鐔などの刀装具、刀剣、浮世絵版画、掛物など)を入手することができた。ある面では大変幸運であったといえる。アレキサンダー家の寄贈については、一九一七年五月三十一日付の『タイムズ』でも報道された。^{3,6)} 美術品と同時に受贈した図書館の資料についても、絵本などを含む和古書も良質のものが多く、国立美術図書館は日本語の蔵書を充実させることができた。ただし、日本美術関係の洋書については、すでに同図書館が所蔵していたものが多く、結局複本の多くは博物館の各部門で業務用の資料として利用されることになった。

また、国立美術図書館に収蔵された和古書

の話題に戻ると、前述したようにそれらの和古書の中に、『見聞諸家紋』、『早引定紋鑑』、『古代紋集』などの家紋関係の資料が含まれていた。ではどうして、ウィリアム・アレキサンダーはこれらの資料を所蔵するようになったのであろうか。一応、筆者は次のように推測している。

アレキサンダーはもともと英国では比較的早い時期に日本の美術品に興味を抱いた一人であり、同じように日本美術に魅了されたホイッスラーの作品に注目したのであろう。その結果、彼はホイッスラーの重要な支援者および彼の作品の収集者になった。ホイッスラーは自分の絵画の額縁に家紋の装飾を施したことからわかるように(次頁写真11)、日本の家紋にも関心を寄せていた。ダンテ・ゲイブリエル・ロセッティにも同じようなことがいえるかもしれない。アレキサンダーがホイッスラーから直接影響を受けたかどうかははっきりしないが、いずれにしても彼も『見聞諸家紋』や紋帳などを収集した。別のいい方をすれば、彼が収集した絵本などの和古書の中に『見聞諸家紋』や紋帳が含まれていた。ただし、アレキサンダーが収集した『見聞諸家紋』を詳細に調べると、同写本が完本でないことがわかる。収集者は日本語を解さなかったと思われるので、そのあたりについては気が付かなかったかもしれない。同写本の後部にあたる三分の一ほどが欠けている。家



写真 11 額縁に家紋が装飾されたホイッスラーの絵画。
 絵画の題名は『紫と金の奇想曲 金屏風』(Caprice in Purple and Gold: the Golden Screen)。フリーア美術館所蔵。
 (絵画) https://asia.si.edu/explore-art-culture/collections/search/edanmdm:fsg_F1904.75a/
 (額縁) https://asia.si.edu/explore-art-culture/collections/search/edanmdm:fsg_F1905.329/

紋の数でいえば、全部で二百六十点ほどが掲載されているはずであるが、同写本には約六割弱に当たる百四十八点ほどしか掲載されていない。掲載されている家紋の武家名でいえば、「橋氏 薬師寺掃部助元隆」、「越智氏 寺町」、「藤民部」、「新見」までは含まれるが、「宿久」、「鶏居鳩 位田」以降が欠けている。また、後部部分が欠けている関係で、佐々木本系とか永正本系などと分類される写本の系統などもはっきりしない。同写本には扉と思われる場所に「永正紋尽」という題があり、デジタル化され、インターネットで公開されている『見聞諸家紋』の写本の中では、国文学研究資料館所蔵の「田安本」に多少類似しているような部分もある。また、国立美術図書館の写本には朱筆により異本と校合したあとが残されている。

なお、海外における日本の家紋研究については、第二次世界大戦後は研究の中心がヨーロッパからアメリカに移動した。研究成果などの一環として、一九七一年にジョン・W・ダウアー著『日本のデザインの要素』(The Elements of Japanese Design)^(c.7) や一九八一年にシャーマン・E・リー著『日本のデザインの獨創性』(The Genius of Japanese Design)^(c.8) などが刊行された。ダウアーの著書については、一九八〇年にその日本語訳である『紋章の再発見』^(c.9) が出版された。ダウアー

が記した同書(『日本のデザインの要素』の「日本語版への序文」によると、同書は、まったく出逢いのなかった三人、すなわちアメリカ人の歴史家ダウアー、数千におよぶ紋の原画を描いた工芸家河本清、日本の紋章学の基礎を築いた沼田頼輔の異例の「合作」であり、また、「河本清が作成した紋の原画はアメリカに渡ったので」同書が日本語版として刊行されることで、掲載されている紋が再び日本へ帰ることになるという。日本語版の題名に關しては、おそらく紋が再び日本へ帰るという意味で、『紋章の再発見』になったのだろうか。

以上、海外における家紋研究資料をめぐる四つのエピソードを紹介してきたが、最後に筆者なりの印象を一言述べてみたい。日本の家紋については、外国人研究者もデザインの面で大変優れている点を高く評価する割合に比べて、日本の図書館などにおける家紋資料、たとえば紋帳などの扱いが多少不十分であるような印象を受ける。日本文化の誇るべき分野として、これらの資料をさらに充実させてもよいように思う。

最初のエピソードで、ベルギー国王に贈呈された太刀に装飾されていた鶴の丸の紋を取り上げた。日本航空のロゴマーク(社章)は「鶴丸」で、鶴の丸の紋に由来する。その「鶴

丸」が日本航空の社章になった経緯にも日本の紋章が関係していた。中丸美絵著『日本航空一期生』によると、鶴丸が社章に採用されるのには次のような事情があった。日本航空は一九五一年の創立当初に航空機をデザインした社章を採用したが、あまり評判がよくなかった。同社は一九五四年に国際線に進出し、社章にも海外の顧客にもアピールする日本的なイメージが求められるようになった。そこで、一九五八年頃からジェット機時代にふさわしい新しい社章を作成しようと検討し

始め、同社のパンフレットやポスターなどにも鶴を使い始めた。たまたま日本航空の宣伝を担当していたアメリカの広告代理店の女性から、日本には紋章があり、すでに使っている鶴を紋章のスタイルにすればいいのではないかと説得され、鶴丸が一九五九年から社章に採用された。外国人の方が早くから日本の紋章（家紋）のすばらしさを認識していたのかもしれない。「日本の良さ」は外国人からも多く学ぶことができるであろう。

- 31) 'Rare Japanese Works: A Gift to the Victoria and Albert Museum', *The Times*, May 31, 1917. p.9.
- 32) <https://asia-archive.si.edu/wp-content/uploads/2017/09/Alexander-William-Cleverly.pdf>. (accessed January 2, 2026)
- 33) R. L. Hobson, 'The Alexander Collection', *Chinese Ceramics in Private Collections*, London: Halton & T. Smith, 1931. p.3.
- 34) Roger Fry, 'Mr. Herbert P. Home and Mr. William C. Alexander', *Burlington Magazine*, vol. 29 no. 158 (May 1916). p. 82.
- 35) V&A Archive, Nominal File, Misses Alexander (ref. MA/1/A317).
- 36) 'Rare Japanese Works: A Gift to the Victoria and Albert Museum', *The Times*, May 31, 1917. p.9.
- 37) John W. Dower, *The Elements of Japanese Design: A Handbook of Family Crests, Heraldry & Symbolism*, New York: Weatherhill, 1971.
- 38) Sherman E. Lee, *The Genius of Japanese Design*, Tokyo: Kodansha International, 1981.
- 39) ジョン・ダウアー著、白石かず子訳『紋章の再発見』淡交社、1980.
- 40) 中丸美絵『日本航空一期生』白水社、2015. pp.233-239.

本記事 pp.5-19 の最上部の家紋画像出典

Hugo Gerard Ströhl, *Japanisches Wappenbuch, Nihon moncho : ein Handbuch für Kunstgewerbetreibende und Sammler*, Wien: Anton Schroll, 1906, p.178.

<国立国会図書館請求記号 Ba-144>

本記事 p.5 の中央部の家紋画像出典

Hugo Gerard Ströhl, *Japanisches Wappenbuch, Nihon moncho : ein Handbuch für Kunstgewerbetreibende und Sammler*, Wien: Anton Schroll, 1906, p.122, p.179, p.180.

<国立国会図書館請求記号 Ba-144>

現在の国立美術図書館（ヴィクトリア・アルバート博物館）の紋帳関係資料

既述した文献以外にも、『早見紋帳大成』、『紋ちくさ』などを所蔵している。『紋ちくさ』は松屋呉服店が1913（大正2）年に出版した紋帳であるが、第一次世界大戦以前における紋帳の一つの完成形とみなされる刊行物である。同書には四千点以上の家紋が掲載されている。『紋ちくさ』について興味深い点は、インターネット上の調査では、国立国会図書館を含めて日本国内の図書館は一館も『紋ちくさ』を所蔵していないのに対し、海外の図書館については、“Worldcat”によると27館が同書を所蔵していることである。同書は“Cinii Books”にも含まれているが、唯一の所蔵館はベルリン国立図書館である。また、アメリカのデジタル資料を提供している“Hathi Trust”にもカリフォルニア大学の所蔵本がデジタル化されて掲載されているが、著作権などの事情で利用は制限されている。一方、古書市場でも“日本の古本屋”には『紋ちくさ』の在庫がない。それに対して、海外の古書のサイトである“Abebooks.com”では、同書のもとの版と複製本（オンデマンド版）の二種類が販売されている。もとの版の古書はドイツの古書店から販売されており、もちろん高額である。

(参考)

“Hathi Trust” <https://catalog.hathitrust.org/Record/012261532>. (accessed January 2, 2026)

“日本の古本屋” <https://www.kosho.or.jp/>. (accessed January 6, 2026)

“Abebooks.com” <https://www.abebooks.com/Chikusa-Iro-habiki-Tokyo-Matsuya-Gofukuten/32245446118/bd>. (accessed January 2, 2026)

<https://www.abebooks.com/chikusa-1913-LeatherBound/30638852152/bd>. (accessed January 2, 2026)



世界図書館紀行

フランス国立図書館

渡邊 春香



パリ市内にあるフランス国立図書館4館の位置関係

筆者は、2025年4月から2026年3月までフランス国立図書館(Bibliothèque nationale de France)リシュリュー館の版画・写真部門に派遣され、同部門が所蔵する和古書の書誌データの整備を行ってきました。

フランス国立図書館は、パリ市内にあるフランソワ・ミッテラン館、リシュリュー館、アルスナル館、オペラ座館の4館と、フランス南部の都市アヴィニオンにあるジャン・ヴィエール館の計5館で閲覧サービスを提供しています。

この紀行では、フランソワ・ミッテラン館とリシュリュー館を中心に各館についてご紹介するとともに、フランス国立図書館の和古書コレクションについても取り上げます。



フランソワ・ミッテラン館の外観



フランソワ・ミッテラン館の入口

フランス国立図書館は、1368年にシャルル5世によって創設された王室図書室を起源とします。中世末期から蓄積された王室コレクションを継承し、フランスで最も長い歴史を誇る文化機関のひとつです。1537年にはフランソワ1世によって世界で初めて法定納本制度が導入されました。

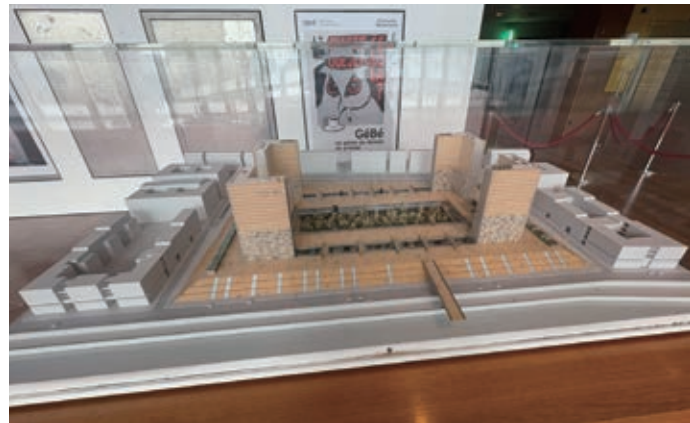
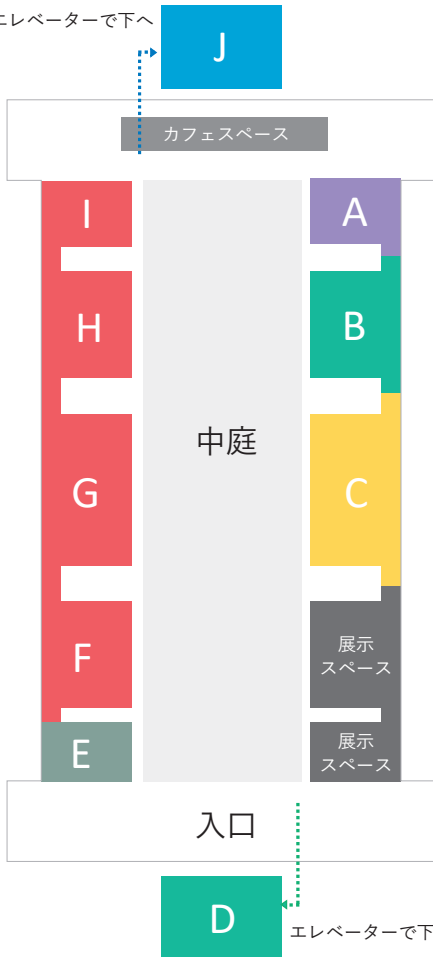
フランソワ・ミッテラン館

フランソワ・ミッテラン館は、2025年に開館30周年という節目の年を迎えました。同館は、フランス国立図書館の中核となる図書館として1400万点以上の資料を所蔵し、そのコレクションは16世紀から21世紀にかけての印刷物、フランスで制作された視聴覚資料（映像資料、音声資料、ビデオゲーム等）、フランスのウェブコンテンツ（法定納本制度に基づき2006年から保存）まで多岐に渡ります。また、デジタル化に向けた先進的な取り組みとして、過去30年間で数百万点の資料をデジタル化し、その大部分を電子図書館 Gallica (<https://gallica.bnf.fr/accueil/fr/html/accueil-fr>) を通じて公開しています。1997年から運営されている Gallica は、フランス国立図書館とその260のパートナー機関の資料約1100万点を無料でオンラインで提供しており、現在最も重要なフランス語圏の電子図書館の一つです。

一般利用者向けの閲覧室 (中庭の上に位置する階)

- A室：視聴覚資料
- B室：定期刊行物・メディア
- C室：科学・技術
- D室：法律・経済・政治
- E室：文献調査・書籍・図書館
- 文学と芸術
- F室：芸術
- G室：外国文学
- H室：フランス文学
- I室：国立児童文学センター
- J室：哲学、歴史、人文社会科学

エレベーターで下へ



フランソワ・ミッテラン館のジオラマ



フォンテーヌブローの森をイメージした中庭

本の形を表現した建築

フランソワ・ミッテラン館の建物は、開いた本の形を表したとされるL字型の4棟の高層ビルが特徴です。高層ビルは、基盤となる建物の四隅に配置され、その中には事務室と書庫が入っています。建物の中央には、パリ郊外のフォンテーヌブローの森をイメージして作られた中庭があります。この中庭は、人の立ち入りが制限され、環境に配慮した管理がされているため、様々な動植物が生息する場となっています。

閲覧室は2層になっており、中庭を囲むように配置されています。利用者用入口と同じフロア（中庭の上に位置する階（Haute-de-jardin））には一般利用者向けの閲覧室があり、その1つ下のフロア（中庭に面した階（Reze-de-jardin））には研究者向けの閲覧室があります。

一般利用者向けの閲覧室

一般利用者向けの閲覧室は、10分野の部屋で構成されています。14歳以上であれば誰でも利用可能です。閲覧室の利用には、1日閲覧券（Ticket lecture 1 jour、料金：5ユーロ）、17時～20時閲覧券（Ticket lecture 17h-20h、料金：無料）、BnF読書・文化パス（Pass BnF lecture / culture、料金：24ユーロ）のいずれかが必要です。BnF読書・文化パスとは、一般利用者向けの閲覧室を1年間無制限に利用でき、その他にも博物館、展示会、コンサートなどのフランス国立図書館の文化



一般利用者向けの閲覧室（G室：外国文学）の様子



一般利用者向けの閲覧室（G室：外国文学）の書架



研究者向け閲覧室（W室：東洋文学と芸術）の様子



日本コレクションの開架資料

筆者は、2025年4月、文学・芸術部門の日本コレクションの担当者に一般利用者向けの閲覧室（G室・外国文学）と研究者向けの閲覧室（W室・東洋文学と芸術）を案内していただきました。それぞれの閲覧室には、日本コレクションが約800冊ずつ開架されています。一般利用者向けの閲覧室には、日本語を学び始めた学生などを対象に、日本語学習教材やフランス語に翻訳された日本文学などが開架され、毎年5%（40冊）を新規購入資料と入れ替えています。中でも英語由来の表現でフィールグッド文学 (Feel-good

プログラムに参加できるパスです。通常価格は24ユーロですが、35歳未満の学生やEU加盟国に居住する26歳未満の方は15ユーロ（割引価格）で購入できます。

研究者向けの閲覧室

研究者向けの閲覧室は、14分野の部屋で構成されています。利用には、研究パス (Pass Research) の取得が必要です。研究パスは18歳以上の方が申請可能で、申請者の身分（学生、教員、研究者など）に応じて登録条件が異なります。料金は、1日パスが6ユーロ、5日パスが24ユーロ、年間パスが55ユーロです。ただし、35歳未満の学生やEU加盟国に居住する26歳未満の方の場合、年間パスは35ユーロ（割引価格）で購入できます。



黙示録をテーマにした本の展示
一番手前の右から2冊目が小松左京のSF小説『日本沈没』、3冊目が大友克洋のマンガ『AKIRA』



研究者向け閲覧室（W室：東洋文学と芸術）の書架

literature) と呼ばれる心温まるストーリーリー
は、フランスで人気のある文学ジャンルの一
つであり、青山美智子の小説『お探し物は図
書室まで』が特に人気だそうです。一方で、
研究者向けの閲覧室には、専門的な辞書や著
名な作家の文学全集などが開架されています。
筆者が訪問した時には、黙示録 (Apocalypse)
をテーマにした展示がフランソワ・ミッテラ
ン館全体で実施され、閲覧室でも関連資料が
展示されていました。日本コレクションとし
ては、小松左京のSF小説『日本沈没』と大
友克洋のマンガ『AKIRA』が展示されて
いました。



リシュリユー館の楕円形閲覧室



楕円形閲覧室の書架にある日本のマンガ



リシュリユー館の庭園

リシュリユー館

リシュリユー館の建物は、1643年にマザラン宰相の宮殿として建設されました。1721年から1722年に王室図書館が設置され、それから300周年にあたる2022年9月に10年以上の全面改修を経てリニューアルしました。

リシュリユー館には専門的な資料を扱う6つの部門があり、「舞台芸術」「地図」「版画・写真」「写本」「貨幣・メダル・古代美術品」「音楽」で構成されています。同館には研究者向けの閲覧室に加え、無料で利用できる閲覧室や所蔵品を展示する博物館もあり、フランスの歴史的・文化的遺産を広く一般に公開するという役割も担っています。リシュリユー館はパリの中心部に位置し、人気の観光名所であるルーブル美術館やオペラ座（ガルニエ宮）の近くにあるため、観光のついでに気軽に立ち寄ることができる点も魅力です。

憩いの場として開かれた庭園

ヴィヴィエンヌ通りに面した入口から入ると、小さいながらも美しい庭園が来館者を出迎えます。この庭園は、全面改修の際に整備され、17世紀にマザラン宰相が造らせた宮殿の庭園とまさに同じ場所に位置しています。桑・竹・パピルスといった紙の原料となる植物を多く取り入れ、紙媒体の作品を保存するという図書館の役割を象徴的に表現した庭園

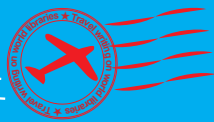
です。晴れた日には、読書をする人やランチをする人などで賑わう憩いの場となっています。

マンガが豊富な巨大閲覧室

建物の1階には、誰でも無料で利用できる楕円形閲覧室 (La salle Ovale) という巨大な閲覧室があります。約2万冊の資料を自由に閲覧することができ、160席の閲覧席が設置されています。巨大なガラス張りの天井が特徴的で、内装が非常に美しく、見ているだけでうっとりしてしまいます。毎朝開室時間の15分ほど前から席取りの列ができるほど人気の閲覧室です。

楕円形閲覧室には、フランス語圏のマンガ「バンド・デシネ」をはじめとする約9000冊のマンガのコレクションがあり、「バンド・デシネ」の起源となる作品から最新作まで楽しめます。ヨーロッパのコレクションが大部分を占めますが、アジア、アメリカ、アフリカ、オセアニア、中東などの世界各国のコレクションも開架されています。『鬼滅の刃』『NARUTO ナルト』『SLAM DUNK』などの日本の人気マンガのフランス語訳も手に取ることができます。

楕円形閲覧室で楽しめるのは、紙の資料だけではなくありません。閲覧室には9つのタッチパネル式ディスプレイが設置されており、フランス国立図書館のミッションや、貴重なコレクション、資料の保存などについて視覚的



楕円形閲覧室で展示されている地球儀の立体模型



楕円形閲覧室に設置されている資料の保存について紹介するタッチパネル式ディスプレイ

に楽しみながら学ぶことができます。中にはクイズやゲーム形式のコンテンツもあり、親しみやすい内容となっています。その他にも、過去の著名な作家や政治家の声が聞けるオーディオコンテンツや、触って楽しめる活字や地球儀などの立体模型の展示などがあります。訪れた際にはぜひいろいろと体験してみてください。

多彩な所蔵品が楽しめる博物館

建物の2階には、王室コレクションを継承するフランス国立図書館の所蔵品約900点を展示する博物館があります。7つの展示室で構成され、書籍、宝石、貨幣、写真、ポスター、舞台衣装など、多彩な所蔵品を鑑賞することができます。

展示室の中でも特にマザラン・ギャラリ（La galerie Mazarin）は必見です。マザラン宰相が1644〜1646年に建築家のフランソワ・マンサールに作らせ、自身のコレクションを展示するために使用していました。天井画にはイタリアの画家ジョヴァンニ・フランチェスコ・ロマネッリによるギリシャ・ローマ神話をモチーフにしたフレスコ画が描かれており、修復作業を経てオリジナルに近い状態に復元されています。

通常の博物館の入場料金は10ユーロですが、BNF読書・文化パスや研究パスを持っている人などは無料で入場できます。

研究者向けの閲覧室

研究者向けの閲覧室としては、「舞台芸術」「地図／版画・写真」「版画・写真の貴重書」「写本／音楽」「貨幣・メダル・古代美術品」の計5つの室があり、研究者向けに専門的な資料を提供しています。いずれも利用するには研究パスが必要です。また、リシュリユー館の建物内には、フランス国立美術史研究所（INHA）とフランス国立古文書学校（ENCC）の図書館も併設されています。リシュリユー館は、まさに芸術や文化遺産の歴史に特化した研究の拠点であると言えます。

続いては、筆者が派遣され、書誌データの整備を行ってきたフランス国立図書館の版画・写真部門の和古書コレクションについてご紹介いたします。

和古書コレクション

日本から遠く離れたフランスの地で和古書が所蔵されていることに驚く方も多いかもしれません。実は18世紀以降、様々な和古書とりわけ絵入りの本がフランスに渡り、日本を知るための貴重な文献として重宝されてきました。フランス国立図書館では、和古書はリシュリユー館の写本部門と版画・写真部門で所蔵されています。

写本部門には、明治以前の和本が約800点（約1800冊）所蔵され、美しい極彩色の挿絵を伴う「奈良絵本」や19世紀に来日した医師・博物学者のシーボルトの旧蔵書など

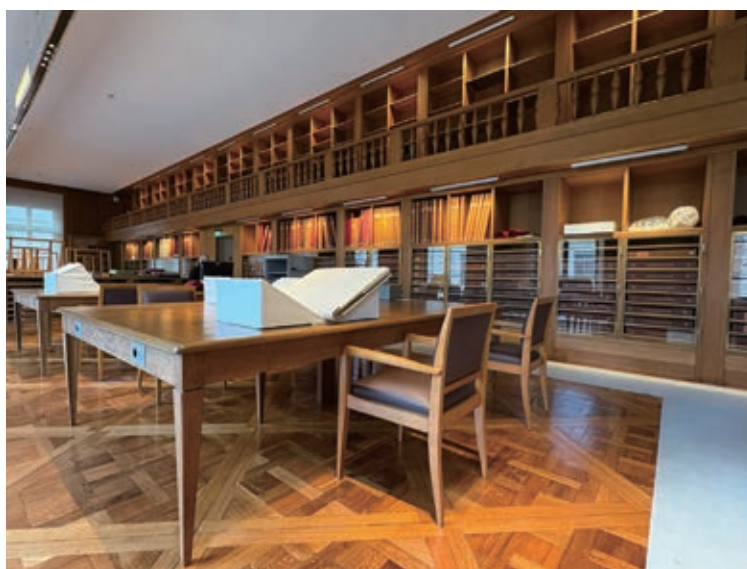


マザラン・ギャラリー

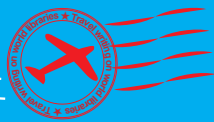
開室時間

	フランソワ・ミッテラン館		リシュリュー館	
	一般利用者向けの閲覧室	研究者向けの閲覧室	楕円形閲覧室・博物館	研究者向けの閲覧室*
月	休館	14時～20時	休館	14時～19時
火	10時～20時	9時～20時	10時～20時	10時～19時
水～金	10時～20時	9時～20時	10時～18時	10時～19時
土	10時～20時	9時～20時	10時～18時	10時～18時
日	13時～19時	休館	10時～18時	休館

* 版画・写真部門の貴重書室の開室時間は、火～木曜日の10時～13時です。



リシュリュー館の研究者向け閲覧室（版画・写真部門の貴重書室）



『狂歌三愛集』8丁裏～9丁表
浅草庵市人 編, 葛飾北斎 画, 文化年間 (1804-1818) 刊, 1冊, 22.7 × 16.5 cm
請求記号: RESERVE DD-2582-4
花月雪を題材に詠んだ狂歌集。掲載画像は月をテーマにした美人図。
©BnF, département des Estampes et de la photographie



『色里三所世帯』第1冊 (巻上) 13丁裏～14丁表
井原西鶴 著, 貞享5 (1688) 年刊, 4冊, 23.8 cm × 16.5 cm
請求記号: RESERVE DD-1940-4 から RESERVE DD-1943-4 まで
24歳で隠居した金持ちの青年が京都、大阪、江戸で色遊びを尽くし、最後に身を滅ぼして武蔵野の土になる物語。版本3巻4冊全ての所蔵が確認できるのは、現時点ではフランス国立図書館だけである。
©BnF, département des Estampes et de la photographie

があります。写本部門のコレクションは、専用サイト Archives et manuscrits (<https://archivesmanuscrits.bnf.fr/>) で検索するのがおすすめです。資料を利用するには、研究パスの取得と資料の予約が必要です。版画・写真部門には、約3500冊の和本が所蔵されています。中でも二大コレクションとして、美術批評家のテオドール・デュレのコレクション (581点1392冊) と日本文学者のエマニュエル・トロンコワのコレクション (507点1656冊) が知られています。デュレのコレクションには、菱川師宣などの江戸前期の絵本や絵入り浄瑠璃本などが特に多いです。一方、トロンコワのコレクションは、文学・地誌・伝記・実用書など幅広い分野の資料が揃っているのが特徴です。これらのコレクションには書誌データが既に作成されていますが、記述が不十分な点も多いため、書誌データの情報を基に資料を検索することが難しい状況でした。そのため筆者は、書誌データに日本語表記を追記したり、著者の典拠データとリンクしたりして書誌データを整備し、国内外の研究者が資料にアクセスしやすい環境を整える仕事を行ってきました。筆者は、エマニュエル・トロンコワのコレクションを担当しましたが、同コレクションの稀書としては、井原西鶴著の浮世草子『色里三所世帯』、葛飾北斎画の狂歌絵本『狂歌三愛集』、『百轉』、複数の歌舞伎せりふ正本を合冊した冊子『役者せりふつらねほめ

ことば』などが挙げられます。特に『色里三所世帯』は、版本3巻4冊全てが揃っていることが確認できるのは、現時点でフランス国立図書館だけです。版画・写真部門のコレクションは、総合目録サイト BnF Catalogue général (<https://catalogue.bnf.fr/index.do>) で検索できます。資料を利用するには、研究パスの取得が必要ですが、資料の予約は不要です。和古書の多くは貴重書扱いで、版画・写真部門の貴重書室で閲覧できます。貴重書室は火・水・木曜日の午前10時から午後1時まで開室しており、早めの時間に入室するのがおすすめです。版画・写真部門での仕事を振り返って
筆者は版画・写真部門からの要望を踏まえて、書誌データに資料のタイトル・著者・出版事項の日本語表記とアルファベット表記、その根拠となった情報源を丁寧に記録してきました。また、資料に記載のあるタイトルのバリエーションも全て記録してきました。和古書の書誌データとして、質の高いものになっていると感じます。
当館の書誌データの作り方と違う点もいくつかありました。特に印象的だったのは、版画の原版を作る彫師を重んじているという点です。日本では、原画を描く絵師に比べると彫師への注目度はやや薄いように感じますが、ヨーロッパでは、緻密な彫りの技巧で版画を芸術の域にまで高めたとされる、15～16世紀



オペラ座館の閲覧室



アルスナル館 18世紀のロカイユ様式の音楽室

のドイツの画家・版画家マルティン・シヨーンガウアーやアルブレヒト・デューラーなどの存在により、彫師の役割も高く評価されているようです。このため、版画・写真部門では、絵師と同様に彫師を書誌データに記録して典拠を作成してしました。このような書誌データの作成方法の違いは興味深く、版画・写真部門での仕事は学びが多かったです。和古書の書誌データの整備を通して、フランスに伝わる和古書コレクションの研究の進展につながれば嬉しく思います。

フランス国立図書館を構成するその他の図書館

アルスナル館

アルスナル館のコレクションは、18世紀の政治家ポールミー侯爵の図書館を起源とし、現在は100万点以上の資料（書籍、雑誌、写本、版画、地図、楽譜など）を所蔵しています。コレクションには、中世から近代にかけての約1万5000点の写本やインキュナブラ（1500年以前に金属活字で印刷された資料）などの貴重な資料が含まれます。BNF読書・文化パスがあれば閲覧室の利用は可能ですが、これらの貴重な資料を閲覧するには、研究パスの取得と資料の予約が必要です。また、アルスナル館には、17世紀に美しく装飾された侯爵夫人の部屋や、18世紀のロカイユ様式の音楽室など歴史的な建築物が

残っており、毎週水曜日に有料のガイドツアーが開催されています。

オペラ座館

オペラ座館は、オペラ座（ガルニエ宮）内に設置された図書館です。同館は、オペラ座とオペラ・コミック座の活動に由来する資料や、オペラ、ダンス、サーカスに関する様々な資料を所蔵しています。所蔵品は、絵画・彫刻・写真・舞台衣装など多岐に渡ります。閲覧室の利用には研究パスが必要です。博物館が併設されており、オペラ座（ガルニエ宮）の自由見学チケットを購入すれば見学できます。

ジャン・ヴィエール館

ジャン・ヴィエール館は、フランス南部の都市アヴィニオンにあり、パリ中心部から鉄道で約3時間半の距離にあります。舞台芸術に関する3万9000冊以上の書籍や雑誌、アヴィニオンでのフェスティバルや舞台芸術に関する資料を所蔵しています。閲覧室は無料で一般公開されています。

参考文献

- ・ フランス国立図書館ウェブサイト <https://www.bnf.fr/fr>
- ・ フランス国立図書館「La BnF François-Mitterrand célèbre ses 30 ans.」2025 <https://www.bnf.fr/sites/default/files/2025-03/DP-%20La-BnF-Fran%C3%A7ois-Mitterrand-c%C3%A9l%C3%A8bre-ses-30ans.pdf>
- ・ クリストフ・マルケ「エマニュエル・トロンコワの和本コレクション 19世紀フランスにおける江戸出版文化史を構築する試み」石毛弓・柏木隆雄・小林宣之編『日仏文学・美術の交流 「トロンコワ・コレクション」とその周辺』(大手前大学比較文化研究叢書；10), 思文閣出版, 2014 <K181-L32>
- ・ クリストフ・マルケ「フランスの和古書コレクション 各所での調査と発見」日仏図書館情報学会編『書物史研究の日仏交流 日仏図書館情報学会創立50周年記念出版』樹村房, 2021 <UM11-M13>

- ※ 本記事で言及した和古書コレクションの資料点数は、クリストフ・マルケ氏の上記2点の論文に基づいています。
- ※ 本記事掲載の写真は筆者が撮影したものです。
- ※ 開室時間や料金等は2025年10月時点のものです。最新情報や詳細はフランス国立図書館のウェブサイトでご確認ください。
- ※ 筆者は、国立国会図書館とフランス国立図書館との協力協定に基づく共同プログラムとして派遣され、フランス国立図書館において、同館の支援のもとで作業を行いました。なお、フランス国立図書館は本派遣プログラム等に関して大日本印刷株式会社から支援を受けているとのこと。

調査及び立法考査局では、国会議員からの求めに応じて、また国会で議論されそうなことについて自発的に調査を行い、国会審議のための資料を提供しています。例えば政治のこと、経済のこと、外交、農業、医療……国会で議論されそうなこととして思いつくのは人それぞれですが、私が所属する「文教科科学技術課科学技術室」では、その名のとおり科学技術に関する調査を行っています。

日常業務については以前にこの月報にまとめられているので（642号、2014年9月刊）そちらに譲るとして、ここでは昨年10月、フランス・パリへの出張のことを御紹介しましょう。

出張の目的は、欧州議会テクノロジ・アセスメント（EPTA）の会議への出席です。調査及び立法考査局は、2016年10月にEPTAに準会員として加盟し、科学技術室がその窓口を務めています。国の議会に対して科学技術に関する調査をサービスとして行う、欧州を中心とする各国の機関が一堂に会し、共通の課題について議論や情報交換を行うというのが、会議の目的です。

今回は、持ち回りの議長であるフランス議会議学技術選択評価局の提案により、エネルギー問題

がテーマとして選ばれました。課題や解決策は国それぞれですが、科学技術政策の調査担当者としては避けて通れない話題です。地球温暖化対策や経済安全保障との関係など、専門家や欧州圏の国会議員も交え、熱心な議論が行われました。

このほかにも、各国が1人3分で業務内容を紹介したり、昼食会や夕食会で話したり。私から当館の「科学技術に関する調査プロジェクト」について話すと、内容の詳細や調査の進め方など、専門的な観点からのものも含め、色々な質問が飛んできます。ほかにも「日本も首相が代わるの?」「四国と九州は良いところだ」「歌舞伎が好き」「パリは初めて? それなら帰る前に絶対エッフェル塔に登っておけ」……。以前の会議で話した人、今回が初対面の人、興味関心も会話も多種多様です。

科学技術分野の国会サービスは、その重要さの割に、どの国においても目立たない存在のようです。だからこそ、分野の広さ、説明の難しさ、複雑な課題に取り組む大変さといった感覚を共有できるのは、とても貴重な機会であると考えています。会議とはいえ、何となく同窓会のような雰囲気を感じるの、そのせいかもしれません。

（文教科科学技術課科学技術室 猫の手拝借）



会議の報告書（左）とパンフレット（右）



国会サービスで
世界とつながる

本屋に

ない本



『こくぶんけん〈推し〉の一冊
創立50周年記念展示』

人間文化研究機構国文学研究資料館刊
2022.4

63 p ; 30 cm

<請求記号 UP74-M4>

あなたの推しの一冊は何だろうか？

『こくぶんけん 推しの一冊』をタイトルとする本書は、2022年に創立50周年を迎えた国文学研究資料館（以下、「国文研」という。）が、記念展示に際して作成した解説冊子である。

第1章「推しの一冊」では、日本文学をはじめとする国文研所属の研究者が、それぞれの推しとして選んだ館蔵資料を紹介する。第一線で活躍する32名の研究者が、推しの魅力や研究意義を1人1ページで解説しており、ページをめくるごとに研究者が登場し、目の前で推しについて熱く語ってくれるかのような贅沢な体験ができる。

紹介される推しの一つに天保15年刊

『宇津保物語』がある。平安時代に成立した物語が江戸時代出版されたもので、本文の余白には、物語の注釈が随所に書き込まれている。刊行以来、

数々の国学者が研究のために他の学者の論を書き写し、資料として後世に伝えてきたのだ。当時の国学者たちがこの物語に強い関心を持ち、研究を行ったことが分かる。このように、本章では研究者が各資料を推しとして選んだ理由を知ることができる。挿絵の美しさや装訂の見事さ、あるいは学問的な重要性など、研究者が推しを選ぶ理由は実に様々だ。しかし、どの紹介にも

研究者の推しへの思いが詰まっている。その思いは、単なる個人の探究心を超えて、国文研を利用してきた多くの人々の思い、さらには、長い年月を

かけて資料を守り、現代に伝えてきた無数の人々の思いへつながっている。

第2章「国文研をひらく」では、これまで国文研の展示であまり取り上げられてこなかった資料に焦点を当て、7つのテーマに分けて館蔵資料を紹介している。『扇の草紙屏風』や『百人一首かるた』などの、「読む」以外の楽しみ方ができる作品もあれば、『渋沢栄一日記』や「土方歳三金子借用証文」などの、歴史上の著名人による貴重な記録も取り上げられており、国文研の所蔵資料の奥深さがうかがえる。

第3章「国文研のこれまでとこれから」では、国文研の50年にわたる歩みを資料と写真で振り返るとともに、日

本文学の枠を超えた、意外な研究活動

も紹介している。例えば、国立極地研究所との共同研究として、日本語の歴史的典籍に記されたデータをもとに、

天体や地球規模の環境問題の研究に挑んでいる。国文研の活動が日本文学の枠を超えて広がっていることがよく分かる。

本書を通じて、日本文学資料の収集・研究にとどまらない、国文研の多彩な取組を知ることができる。国文研の歴史の重みを感じるとともに、今後の展開への期待が高まる一冊だ。日本文学に興味がある人もそうでない人も、ぜひ本書を手にとってみてほしい。研究者の情熱に触れながら、きっと、あなたの自身の推しの一冊を探したくなるはずだ。

（白水はるか）

※本書は国文学研究資料館学術情報リポジトリでPDFが閲覧可能です。

国立国会図書館は、法律によって定められた納本制度により、日本国内の出版物を広く収集しています。このコーナーでは、主として取次店を通さない国内出版物を取り上げて、ご紹介いたします。

ミニ電子展示「本の万華鏡」第38回「ふりかえるブライダル〜結婚式の歴史と文化〜」公開

令和8年1月20日に、ミニ電子展示「本の万華鏡」第38回「ふりかえるブライダル〜結婚式の歴史と文化〜」を公開しました。

結婚式に多様なスタイルがみられる現代において、国立国会図書館が所蔵する図書、雑誌、錦絵（浮世絵）などとともにその歴史をふりかえり、日本の結婚式がどのように形づくられてきたのかを探ります。

第一章では、平安時代から江戸時代までの結婚式を取り上げ、第二章では、明治から昭和にかけて行われた神前式やキリスト教式、仏前式などの挙式スタイルを紹介し、第三章では、衣装や髪型、引き出物を取り上げています。

お手持ちのパソコンやスマートフォンからぜひご覧ください。

<https://www.ndl.go.jp/kaleido/38>



第38回「ふりかえるブライダル〜結婚式の歴史と文化〜」



国立国会図書館サーチ等のログイン方法が6月から変わります

令和8年6月から、セキュリティ向上のため、国立国会図書館サーチ、国立国会図書館障害者用資料検索（みなサーチ）、国立国会図書館デジタルコレクションにおいて、登録利用者の皆様がログインする際の認証方式を、メールを利用する認証方式に変更します。

新しい認証方式では、ログイン時に「利用者ID」「パスワード」に加え、ご自身の登録メールアドレスに送付される一回限りの「認証コード」が必要になります。なお、当館へのご来館時に館内に設置された端末を利用する際のログイン方法は変わりません。

メールアドレスをまだ登録されていない方は、認証コードを受け取れるよう、国立国会図書館サーチ等にログインして、受信可能なメールアドレスのご登録をお願いします。メールアドレスを登録済みの方も、ご登録のメールアドレスが現在、受信可能であることをご確認ください。

詳しくは、国立国会図書館サーチ等に掲載するお知らせをご確認ください。具体的な変更日程も、今後国立国会図書館サーチ等のお知らせでご案内します。

【重要】メールを利用する新しいログイン方法への変更のお知らせ（6月）

<https://ndlsearch.ndl.go.jp/news/2026030300/>



新副館長就任

山地康志国立国会図書館副館長が令和7年12月31日付けで退任し、令和8年1月1日付けで木藤淳子が副館長に任命されました。



木藤淳子副館長

おもな人事

△退職▽

令和7年12月31日付け

副館長

山地 康志

△異動▽ ※（ ）内は前職

令和8年1月1日付け

副館長（総務部長）

木藤 淳子

専門調査員 調査及び立法考査局海外立法情報調査室付（主幹 調査及び立法考査局海外立法情報調査室付）

河合 美穂

総務部長（専門調査員 調査及び立法考査局長 松浦 茂 調査及び立法考査局長、収集書誌部長兼務（収集書誌

部長）

竹内 秀樹

NDL Topics

韓国国会図書館、韓国国会立法調査処との業務交流(第14回)

令和7年12月2日に韓国国会図書館(NAL)、翌3日に韓国国会立法調査処(NARS)との共同セミナー方式による業務交流を韓国で行いました。この業務交流は、両国の立法補佐機関の間で、それぞれの国会サービスについて深く理解し合うことを目的として行っているものです。今回は令和2年に開催した第9回以来の対面での開催でした。NALとのセミナーでは、韓国側から国会図書館データ基盤立法支援サービスについて、日本側から国立国会図書館による国会への情報提供サービスについて報告が行われた後、インフォグラフィック資料の提供や人材育成等について質疑応答が行われました。NARSとのセミナーでは、両機関からそれぞれの国における米国との関税交渉に係る成果と課題について報告が行われた後、日本における関税交渉への反応や物価への影響、韓国における関税措置の影響を受ける企業への支援等について質疑応答が行われました。

令和7年度東日本大震災アーカイブシンポジウム「震災アーカイブの構築・継続・次世代への継承」を開催しました

令和8年1月11日、東日本大震災アーカイブシンポジウムを東北大学災害科学国際研究所多目的ホールで開催し、オンライン同時配信を行いました。本シンポジウムは、国立国会図書館と東北大学災害科学国際研

究所との共催により、毎年1月に開催しているものです。

東日本大震災の発災から15年の間、国内外の様々な機関が、それぞれの強みを生かした特色ある震災アーカイブを構築し、継続的に運営してきました。教育現場における震災アーカイブの活用事例も生まれています。本シンポジウムでは、研究者、震災アーカイブの担当者、教員・生徒の皆様から、震災アーカイブの構築の経緯や現況、震災の記憶の伝承活動についての報告をいただきました。国立国会図書館からは、今後の国立国会図書館東日本大震災アーカイブ(ひなぎく)のシステムについて報告し、東北大学からは、自然災害アーカイブの今後の在り方について報告しました。その後、パネルディスカッションでは、震災アーカイブの構築や継続、次世代への継承に向けた取組の課題、方向性をテーマに議論がなされました。



パネルディスカッション

シンポジウムの詳細は以下に掲載しています。
<https://kn.ndl.go.jp/static/2025/11/271>



資料のデジタル化に伴う原資料の利用休止について

国立国会図書館では、所蔵資料の保存と利用の両立を図るためデジタル化による媒体変換を行い、作業が終了した後は、原資料に代えてデジタル化資料を提供しています。このデジタル化作業のため、次のとおり一部の資料の利用を休止します。

○対象資料

- 国際子ども図書館所蔵の国内刊行図書
約2万4000冊
- 利用休止予定期間
令和8年3月3日から令和8年11月30日まで

※ご利用いただけない資料は、国立国会図書館サイトの書誌詳細画面の「国立国会図書館の所蔵」で、「作業中」デジタル化のため」の表示でお知らせしています。ご利用にあたっては、事前に検索してご確認ください。

※詳細については、当館ホームページ「デジタル化作業に伴う原資料の利用休止について」に掲載しています。

<https://www.ndl.go.jp/preservation/digitization/unavailable>



ご不便をおかけしますが、国民の文化的資産を後世に伝えるため、ご理解とご協力をお願いいたします。

第19回科学技術情報整備審議会

令和7年12月17日、第19回科学技術情報整備審議会がハイブリッド方式で開催され、審議会委員・専門委員13名のほか、館長、副館長、幹事等職員17名が出席しました。提言案「第六期国立国会図書館科学技術情報整備基本計画策定に向けての提言―私たちの社会と未来をつくる知識基盤を目指して―」について審議が行われ、全会一致で了承されました。提言は、安浦委員長から館長に手交されました。

提言では、オープンサイエンス・オープンアクセスの進展や生成AIの普及により情報環境が劇的に変化の中で、現在のデジタル社会を生きる私たちだけではなく、さらに100年後の未来の人々からも信頼される国立国会図書館の知識基盤を構築することを目指して継続的に取り組む必要があるとしています。国立国会図書館の今後の取組を「知識基盤の整備」、「知識基盤の利活用」、「外部との連携協力」という三つの視点から整理し、民間ウェブサイトの許諾による収集の強化をはじめとする資料の収集対象範囲の拡大検討や所蔵資料のデジタル化・全文テキスト化の更なる推進、NDLサーバーの拡張によるユーザーの知識創造プロセスの支援や潜在的なユーザーへのアプローチ、研究機関・研究者との協働研究の基盤整備や国立国会図書館の研究力の強化など具体的な取組を進めることを求めています。

館長からは、提言を受けて、「第六期国立国会図書館科学技術情報整備基本計画」を策定し、提言内容の実現を目指す旨の発言がありました。

科学技術情報整備審議会委員名簿

(五十音順 敬称略) (令和7年12月17日現在)

委員長

安浦 寛人 九州大学名誉教授

委員長代理

竹内 比呂也 千葉大学副学長

附属図書館長、アカデミック・リンク・センター長
大学院人文科学研究教授

委員

浅川 智恵子 日本科学未来館館長

池谷 のぞみ 慶應義塾ミュージアム・コモンズ機構長

大隅 典子 慶應義塾大学文学部教授

東北大学経営戦略本部アドバイザー
大学院医学系研究科教授

日本学術振興会理事
国際医学情報センター理事長

北川 雄光 情報・システム研究機構国立情報学研究所長

黒橋 禎夫 日本原子力研究開発機構理事長
文部科学省大臣官房審議官(研究振興局及び高等教育政策連携担当)

小口 正範 文部科学省大臣官房審議官(研究振興局及び高等教育政策連携担当)

坂下 鈴鹿 文部科学省大臣官房審議官(研究振興局及び高等教育政策連携担当)

野末 俊比古 青山学院大学教育人間科学部長・教授

橋本 和仁 科学技術振興機構理事長

林 隆之 政策研究大学院大学政策研究科教授

村山 泰啓 情報通信研究機構NICTナレッジハブ上席研究員

渡部 泰明 人間文化研究機構国文学研究資料館長

専門委員

池内 有為 文教大学文学部准教授

生貝 直人 一橋大学大学院法学研究科教授

大向 一輝 東京大学大学院人文社会系研究科准教授

* 提言を含む審議会に関する情報は、左記に掲載しています。

ホームV資料の収集V科学技術情報整備V科学技術情報整備審議会

<https://www.ndl.go.jp/collect/tech/council>



安浦委員長から館長に提言を手交

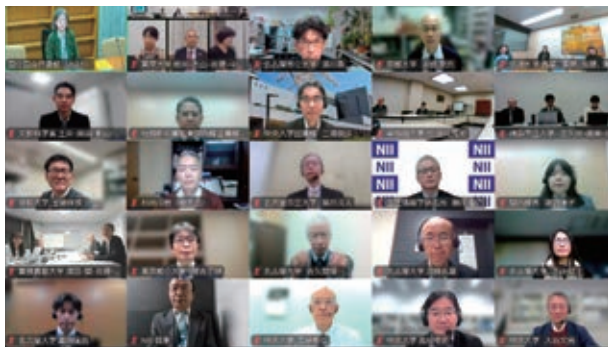
NDL Topics

令和7年度国立国会図書館長と大学図書館長との懇談会

令和7年12月3日（水）、標記懇談会がオンラインで開催されました。この懇談会は、国立国会図書館が、国公私立大学図書館協力委員会委員館の図書館長及び関係機関の代表者を招いて毎年行っているものです。

はじめに、大山努東京大学附属図書館事務部長が「大学図書館の目指す『デジタル・ライブラリー』におけるコンテンツ連携」と題して、「2030デジタル・ライブラリー」推進に向けたロードマップを踏まえた「東京大学デジタル図書館構想」の概要、今後の当館とのコンテンツ連携の可能性と実現に向けた課題について報告し、当館からは、「大学図書館との連携による読書ハリアフリー環境の整備―国立国会図書館の障害者サービス―」と題し、読書ハリアフリー環境の整備に係る当館の取組について、大学図書館との連携が特に重要な事業を中心に説明し、連携に係る今後の取組の方向性を提示しました。

その後に行われた意見交換では、当館の視覚障害者等用データにおける図表等の表現方法についてや、東京大学が「2030デジタル・ライブラリー」において2030年の望ましい大学図書館の姿として掲げた「シームレスに利用できる総合的な利用環境」の具体的な実現イメージについて等の質疑がありました。また、当館のデジタル化資料送信サービス及び視覚障害者等用データ送信サービスに関して、送信対象となる資料の拡大及び簡便な認証の導入に対する期待が出席した大学図書館長から述べられました。



令和7年度国立国会図書館長と大学図書館長との懇談会

『国立国会図書館月報』令和8年刊行予定

令和8年は、左記の号を合併号として刊行する予定です。

- ・ 783 / 784号 (令和8年7 / 8月)
- ・ 785 / 786号 (令和8年9 / 10月)

新刊案内

レファレンス 901号

令和8年の年頭のご挨拶

英国における政治献金への規制をめぐる動向―外国

からの献金に対する規制を中心に―

ニージーランド議会における委任立法統制

―ILO条約の制定・適用監視と国内法への影

響



A4 88頁 月刊 1,100円 (税込)
発売 日本図書館協会

入手のお問い合わせ

日本図書館協会

〒104-0033 東京都中央区新川1-11-14

電話 03(3523)0812



第 35 回国立国会図書館関西館資料展示

お届けものです!

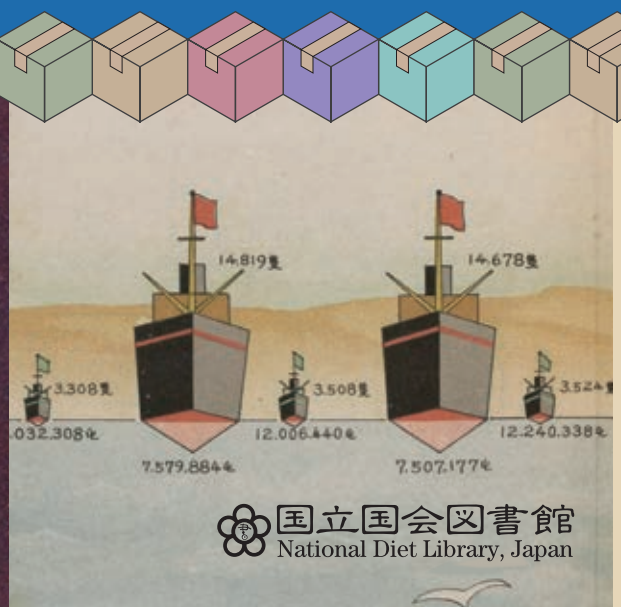
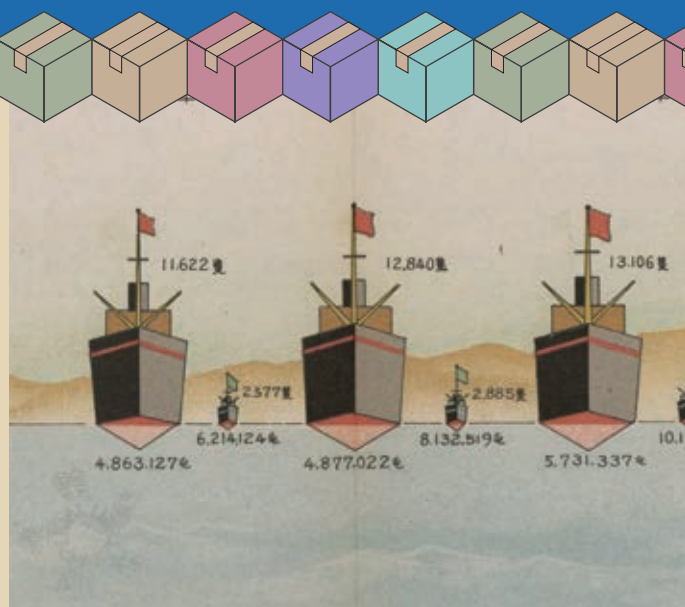


～モノと情報の輸送史～

令和 8 年 2 月 19 日 (木) >> 3 月 17 日 (火) 開館時間：9:30 ～ 18:00 (日祝休館)

会場：国立国会図書館関西館 閲覧室

○入場無料・年齢制限なし○



3

NATIONAL
DIET
LIBRARY
MONTHLY
BULLETIN
2026.3

NO.779

MARCH
2026

CONTENTS

- 01 <Book of the month - from NDL collections>
Noh as seen through the eyes of non-Japanese
T. Nogami, *Japanese Noh Plays: How to See Them*
- 05 Materials for Japanese Studies outside Japan:
Researching family crests KOYAMA Noboru
- 20 Travel writing on world libraries
Bibliothèque nationale de France
- 30 <Tidbits of information on NDL>
Connect with the world through legislative research and information services
- 31 <Books not commercially available>
Kokubunken 〈oshi〉 no issatsu: *Soritsu 50shunen kinen tenji*
- 32 <NDL Topics>

国立国会図書館月報

令和8年3月号 (No.779)

令和8年3月1日発行

発行所 国立国会図書館
編集者 田中智子
責任者

印刷所 株式会社丸井工文社

〒100-8924 東京都千代田区永田町1-10-1
電話 03 (3581) 2331 (代表)
FAX 03 (3597) 5617
E-mail geppo@ndl.go.jp
<https://www.ndl.go.jp/>

本誌に掲載した論文等のうち意見にわたる部分は、それぞれ筆者の個人的見解であることをお断りいたします。
本誌に掲載された記事を転載する場合（全文または長文にわたり抜粋する場合、または図版を転載する場合）には、
事前に当館総務部総務課にご連絡ください。
本誌517号以降、PDF版を当館ホームページ（<https://www.ndl.go.jp/>）>刊行物>国立国会図書館月報でご覧いただけます。



NATIONAL
D I E T
LIBRARY
MONTHLY
BULLETIN
2 0 2 6 . 3

 国立国会図書館
National Diet Library, Japan

図

玉

玉

冊

人

六